

---

# 黄昏をとどめて

溝部 成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄昏をとどめて

### 【Nコード】

N6875Y

### 【作者名】

溝部 成

### 【あらすじ】

「君と僕の好きは、違いすぎるよ」

内憂外患により崩壊しつつある帝国。

かつて国首と呼ばれ、繁栄を謳歌した青家一族の末娘エンジュは、西部戦役の和約のあかしとして、西家の公子ソウセツと婚約し、辺境へ向かう。

年も育った環境も大きく違う相手に、戸惑うが…。

一方、皇宮では皇位継承をめぐる対立から、大きく政局が動こうと  
していた。

空を大鳥が旋回している。

遠く、幟がいくつも翻る城塞。見渡す荒野。

草はほとんどなく、遠い地平まで赤い土に埋め尽くされている。

曇天だ。雲が厚く立ちこめる。

激しく風が吹きつけ、吹雪のような音を立てた。人の泣き声のようにも聞こえる。

砦は鉄の厳めしい大門で固く閉じられ、見張りが壁に等間隔に配置されている。

戦場だ。

「お前はここで補給の指揮を」

大柄な体を曲げるようにして、男は狭い戸口で振り返った。堂々とした体躯の青年だ。

ずいぶん土にまみれてはいたが、彼がまとうているのは紛れもなく絹の白い軍装で、左手には大ぶりの実用的な刀剣をもっている。

唯一の装飾品は額飾りで、白銀の複雑な紋がぬいとられ、中央には涙型の大粒真珠が揺れている。

白は、西家の色だ。

「いいな？」

大らかで人をひきつける笑顔で彼は言った。

外では鬨の声が上がる。

むき出しの石壁に、西からの陽が、うすく光をさし入れる。

「なぜ。…厭だ、わたしも連れて行け」

木の椅子に座った別の青年が、頑是ない子どものように首を振っ

た。

彼の前には部屋の大部分を占める卓が置かれ、書きかけと思しき書類と筆が転がっていた。

振り返った青年とは同年代、そして口調から同輩に見えるが、彼には行軍の将校らしい様相がまったく感じられない。

略式の軍装を身につけはしているが剣は佩かず、長く伸ばした髪を白と赤の組みひもで結わえている。

白い服にも殆ど汚れらしきものは見当たらない。そして軍人としては、繊細な面。

その顔は今は怒りで、上気している。

出て行こうとしていた青年が、苦笑した。

「もう決めんだ、お前はここに残す」  
狭い部屋には2人しかない。

石の壁に沈黙が落ち、兵士たちの士気の昂りが木製の床を通して伝わってくる。

剣を入り口に立てかけ、自分を睨む青年の前までくると、卓上の紙をとりあげて目を走らせた。

口笛をふく。

完璧だな、彼の口がそう動いた。

その行為に、座ったままの青年の眉間に皺がよる。目には剣呑な光がもった。

「サイカ、わたしの話を聞け」

しかし、サイカと呼ばれた青年は口元に笑みをたたえている。

「おう、でもまず俺の話からだ」

彼は片手を挙げて制止すると、早口に語った。

「総指揮権は叔父上にゆずった。俺が連れていくのは、4隊。お前は居残り」

「だから、なんでわたしがここにいなければならない、」

「お前が俺の副官だから」

「だったら、なおのこと」

しかし、サイカの意思は変わらなかった。

立ち上がるうとする相手をじゃれるように椅子に押しとどめ、紙をひらひら振る。

「急襲が俺の担当なら、これはお前の担当」

うまくいったら、な。

軽口だったが、その言葉に青年は押し黙った。

薄暗い室の中では、紙の内容も彼の表情もはつきりとは読み取れない。

どうやら、サイカの言葉をしぶしぶ受け入れたらしく、大きなため息を聞かせて、青年は椅子から静かに立ち上がった。

「吾が友に武運を。勝ちて帰れ」

勝ちて、帰れ。

古くから繰り返されてきた戦士への餞の言葉を、口にする。

「我らの風に、勝利を」

サイカはそう返すと、相手の肩を軽く抱き、部屋をあとにした。

荒野のその地平線。

鉄の鎧で覆われた軍馬が、横列にずらりと並んでいるのが見えた。鈍いてい鉄と、盾を打ち鳴らす音。その数、十万。

強い風が、耳元でごうごうと鳴り響く。騎士たちが身につける鎧は鉛色に輝き、兜は十字に切りこみが入られている。

グルジムカの騎馬の軍勢だ。大陸最強と呼ばれる騎馬軍。帝国の西部をおびやかす敵。

大門の前でサイカは合図をして、馬にまたがった。

砦の上に、軍旗がひるがえる。

幾度も洗いをかけた白。

今日は、戻ってこられるだろうか…。

サイカは、弱気な自分を嗤うように一度、目を閉じた。

この作戦は、誰が見ても無謀だ。

だが、退路はない。

年若い騎士たちが緊張した面持ちで、彼の号令を待っている。

グルジムカの軍はここからは見えない。鋼鉄の軍団に対して、彼らは胸当てと盾で武装しているものの顔をさらして、いかにも無防備に見える。

騎士たちが風を呼ぶ祈りの声が耳を過ぎる。

耳慣れた言葉。

武運を願うまじないだ。

西家の部隊の真ん中で、サイカは息をついた。

「若、ソウセツ様は」

老騎士が先頭のサイカの横に馬をつける。

白いあごひげを加えた武人で、彼の剣の師でもあった。タカサキという。

「あいつは、置いてきた」

「それはそれは」

サイカの簡潔な返事に、タカサキは声を立てて笑った。

戦場での気負いもない、朗らかな声。

サイカも歴戦の老将に軽口で答える。

「ソウセツに何かあれば、羽鳥<sup>ハトリ</sup>が泣く」目線を前へ戻して、続ける。

「敵は怖くないが、妹は怖い」

サイカの周りでどつと、にぎやかに笑い声が上がった。

行軍を共にした騎士たちだ。

「いよいよですな」

タカサキが揚々と言う。サイカは静かだが、強く頷いた。

「ああ、エテを得て還るぞ」

敵領にある交易都市をあげる。

この西部国境は、隣国グルジム力の侵攻を受け続けている。

戦線は一進一退を繰り返し、特に打つ手もない。

「今こそ、徹底的な打撃を与えて、蛮族を追い払う。雪が来る前に」

巨大な領土や豊かな資源を誇るグルジム力と、この弱小の帝国とは、根本的に持久力が違う。

総力戦ともなれば、長くは保つまい。

グルジム力と半島で隣接した西部地域が一番多くの犠牲を払うで

あろうことは、簡明な事実だ。

そのまえに。

そうなる前に、敵を大きく叩いておかねばならない。

サイカの声は、焦りと気負いさえ孕んでいる。

「勝つて帰る」

「御意」

「必ずだ」

「いくぞ」

短い掛け声とともに、サイカは馬を走らせた。彼に従う4隊も遅れじと騎首を返す。

100名足らずの奇襲隊。

機動性にすぐれた、年若い騎士たちで構成された臨時の部隊だ。

陽が落ちてから、2隊を本営にぶつけ、その残りで敵軍の裏をかく。

それが、彼らに課された任務だ。

砦に残った叔父とは最後まで相容れなかった。

「せいぜい、グルジム力の大軍におびえているがいいさ」

かげる陽を追うように、馬を走らせながら、サイカは口の中でつぶやいた。



北の星が、白く輝き始めるのが合図だった。

馬のいななき。嵐のような怒号。

整然と並んだ鉄の甲冑の右軍へ、急襲がかけられる。

白い軍勢の中心でサイカが、刀身を頭上に掲げて叫ぶ。

「大地を血で染めよ！我らの風を呼べ！勝利を！！」

圧倒的な大地の震動と、舞い上がる砂塵。

血しぶきと、周りで上がる悲鳴。引きずられそうになる、生々しい戦場の様相。

彼は、集団の陣形を解き、果敢に敵の中へ馬を走らせていく。

相手のふるいかぶった剣を見事な綱さばきでかわし、踵を返す。

そのまま相手の懐へ刀を突き出す。血が彼の顔を染める。

息つく間もなく、後方からも敵が刀を振るってくる。サイカは渾身の力で相手を突き返し、軍馬に剣を突きたてた。

馬の悲鳴。棒立ちになった馬から相手は勢いよく投げ出され、その期を逃さず、彼は短刀を相手の喉元に正確に突きたてた。

サイカはほう、とため息をつき乗馬したまま屈みこみ短刀を抜き取ると髪をかきあげ、口元についた血をなめた。

「おのれ、白い幽鬼め！」

大陸西方訛りの罵りが聞こえ、横手から彼のもとへ斬り込んでくる。

強い怒りとともに繰り出された刀は重く、打ち合いは数度続く。

しかし、サイカの剣の腕の方が優れて速く、相手は喉元に刃を受けて馬から滑り落ちた。

サイカは肩で息をつくとき、血に濡れた刀を振った。  
そのときだった。

背後から風をうなるような音が響き、強い衝撃とともに振りかえる間もなく、どつと矢が突き刺さった。

サイカはその勢いのまま、馬から滑り落ち、前に倒れるように両手を地面につく。

赤い砂煙と、周りの怒号が一瞬、止んだ。  
衝撃に痛みが加わる。  
背がもえる。

燃えるように熱い。

は、と彼は声を出すように息を吸った。  
吐き出す息とともに、口から鮮血が溢れる。

とつさにサイカは口元を押さえたが、次に吸った息はすぐに咳にかわった。

まだ、…まだだ。  
まだ、終わっていない。

苦しい息の中で、彼は胸元から白い布を引っ張り出した。  
明らかに武人の持ち物ではない、繊細な布地。ハンカチだ。銀糸で花の刺繍が縫いとられている。その、ひと針ひと針を確認するうちに彼は指先で撫で、口元におしあてた。

「羽鳥…」

約束が、という言葉が風が拾う。

タカサキが、叫び声をあげながら、馬を走らせてくるのが目に入  
った。

ああ、すまない…彼は胸をつかれるような痛みとともに、暗闇に  
身をゆだねた。

誰かが呼んでいるような気がした。

蝋燭のほのおが揺れる音がし、エンジュははっと目を開く。

どうやら、うたた寝をしていたらしい。

幾度かまばたきをすると、徐々に意識がはつきりとして、頭の後ろが重く痛んだ。

開いたままの分厚い装丁の本を閉じると、エンジュは机に突っ伏した。

「エンジュ様、エンジュ」

その声で、もう一度彼女は我に返った。

「なあに、」

あわてて手すりに寄って、階下をのぞく。コウヒだ。

「もうすぐ終わります。いつもつき合わせて、ごめんなさいね」

コウヒは、彼女が寝ていたことを見抜いたらしい。こちらを見上げる顔は微苦笑を浮かべている。

エンジュはきまり悪くなって、机の本を脇にかかえると、古びたはしごを細心の注意を払って降りた。

分厚い硝子の天窓からは薄く光がさしこみ、はしごは1段を踏むごとにぎしぎしなり、埃が舞う。

エンジュは最後の段から石床におりると、ほっと息をついた。

確認するまでもなく、年月と湿気によって、はしごは根元から腐りつつあった。

それだけではない。

石床は、一部が隆起、陥没し、土が見えている部分もある。

「もう上にあがるのは、およろしく下さいな」

あなたがケガしないかと、ひやひやします。

コウヒは心配顔で、ため息をついた。

「でも、上の棚にしか物語が置いてないのだから」

エンジユは、にっこり笑って手に持った本を見せた。

孤独な竜と美しき姫巫女の恋物語である。

この国の者なら、幼い頃に一度は寝物語に聞いたことがあるだろう。誰でも知っているおとぎ話だ。

「あら『竜と姫君』。懐かしいわ。そんなのも、ここにありませんね」

装丁の美しい表紙をのぞきこんで、感心したようにコウヒは言う。エンジユは、曖昧にほほ笑んだ。

これは、ただのおとぎ話ではないかもしれない、そうコウヒに言いたかったが、なぜか喉の奥に言葉がつかえた。

裏表紙には、英秀王エイシュウの御世の年号が刻まれていたが、作者の記名はなかった。

今から250年も昔に書かれた本だ。

段の上の史書に紛れるようにして、置かれていたのを見つけたのだ。

ばらばらとめくっただけだが、乳母たちに聞いた物語よりよっぽど詳しく書かれているようだ。

ぼんやりとそんな物思いにふけっていると、コウヒが嬉しそうに話を継いだ。

「ここは本当に、さまざまな文献があって、素晴らしいですわ」  
勿論、ここには重要な外交文書やいにしへの法令、史書が眠っている。

コウヒと禁を破って入った、青家の古文書庫なのだから。

ここに置いてあるのは、大半が原本であり、重要な法文書である。ただし、その多くは虫にくわれ、黴におかされ、判読することも難しい。

青家が有り余る富を支配していた頃　いや、『国首の君』と呼ばれ権勢に酔ったころには既に、法書など見向きもされなくなっていたに違いない。

風雨にさらされ、朽ちるにまかせた古い禁書庫など、訪れる者となない。

ある日エンジンが割れ窓から書庫への出入りを見つけたことと、彼女の家庭教師であるコウヒが学院で歴史を専攻していたことは、偶然だったと言えよう。

エンジュはコウヒと、書架に文献を並べ直しながら、机いっぱい  
に散らされたメモに目をやった。

書きなぐりの省略記号ばかりで、エンジュには意味が分からない  
ながらも、どうやら収穫があっただけいいことは、コウヒの表情で分  
かる。

「今日は何を調べていたの？」

「貿易の収支報告です」

280年前の交易の様相にはまだほど遠いですが、とコウヒは語  
った。

彼女は、最高学府である国学院に籍をおいている。

『専門化はよろしくない。よい研究者というのは、満天下のあらゆる  
歴史事象に対応できなければならない』

師である高名な歴史家ジケイは、つねづね政治的、外交的、制度  
的、叙事的な出来事記述の歴史を否定しているのだという。

弟子であるコウヒたちにも、それは求められている。

未来志向の歴史学を推進することを。

彼女が選んだのは、縦系に鎖国という貿易の転換期を、横系に人  
物をとるという手法だった。

「どれくらい進んだ？」

「6頁、といったところです」

読み進めている文書は、古語で書かれており、なかなか思っよう  
には進まない。

コウヒは先は長い、とばかりに肩をすくめた。

エンジュは、微笑をもらしてしまいそうになり、とっさに吐息にかえた。

コウヒが青家にいるのは、研究のためだ。ここには当時の外交文書が山のように残っている。

エンジュの父が寄宿を認める代わりに、彼女に提案したのは、未婚の家庭教師をすることだった。

「ずっと居てくれればいいのに」

「何か言いましたか？エンジュ様」

「いいえ、何も」

とっさにエンジュは首を振る。うっかり本音を聞かれてしまうところだった。

取り繕うように、重くて破損しやすい書物を本棚に戻す作業に、気持ち切り替える。

そのときだった。

耳元で風が髪をふわり、ともちあげる気配がした。

さわさわと木々がざわめくのが、割れた窓越しに見える。

『…でいるわ…はやく。…もどらなきゃ…』

ささやくような、笑い声のような、軽やかな声が聞こえる。

風の知らせだ。

エンジュは外に視線を向けた。

遠くに、回廊を早足でゆく侍女たちが見えた。エンジュを探しているに違いない。

「戻りましょうか、」

コウヒも理解したらしい。荷物を手早くまとめると、内鍵を開け



て書庫の外へ出た。

彼女が出たことを確認してから、エンジュは内側から鍵をかけ直す。そうして割れた窓辺から、外へ出た。

入るときは、この手順が反対になる。

ここは禁じられた書庫である。鍵のありかをエンジュは知らない。年齢より小柄で痩せているエンジュには、窓からの侵入が可能だが、コウヒはそうはいかないのである。

出るときに窓枠で、首と足をひっかけ、いつまでこれが可能なのか、エンジュは物語を胸に抱きかかえながら、自問自答した。

「姫、どちらにおいででしたか」

空気を張るような、凜とした声が響いた。

エンジュは慌てて本を閉じ、振り返る。

まなじりをつり上げて立っているのは、彼女の教育係であるオノセだ。

白いかんばせ。一部の隙もなく髪を結いあげ、流行りの形に複雑に結ばれたえび茶色の腰帯。いつも通り、完璧な装い。

「どこも」

エンジュはそっけなく答えた。

「わたくしが何度も申しあげていますように、」

あとの言葉を引き取って、エンジュは続けた。

「父君のいる邸で、外をうろうろと歩き回ってはならない、でしよ？」

「どこでも、でございます。御身に危険が及ばぬようにするのが、わたくしのつとめ」

「退屈な仕事ね」

「…また、コウヒ様と一緒に出かけられたのですね」

「図書室に行っていただけよ」

「探しに行かせましたが、侍女たちは見つからないと戻ってきましたわ」

「本を探していた時だったのよ、きっと」

「明りを消して、ですか？」

ばれている。

エンジンとは、唇をかみしめた。禁書庫に入ったことだけは、知られるとまずい。

「じゃあ、休憩に外に出ていたのよ」

「コウヒ様がいらしてから、姫はかわりましたわ」

以前は、嘘をついたりはなさらなかった…。

その言葉にエンジンは、オノセを睨みつけた。

「オノセは、コウヒが嫌いだものね」

「そんなことを申し上げているではありません」

「じゃあ、何なの」

「あの方は、」

そこまで言つて、はつとオノセは息をのみこんだ。

エンジンには彼女が言葉をのみこんだ理由を知っていた。知っていたから、不機嫌に別の話題をふる。

「私たち、今にここで埃にまみれて、死んでしまつね。何もするところがなくなつてね」

「そんなことはありませんわ」

オノセは嚙んで含めるように続ける。

「美しく整えられていますもの、お部屋も調度も」

かみ合わない言葉に、お手上げだと、エンジンは天井を睨んでため息をこぼした。

確かに、この邸も部屋も豪奢で美しい。

父の権勢があまねく国中から、一級品ばかりを集めているのだから。

「あなたは、美しいものに囲まれていたら、満足なのでしょう」

つい、うらみ事が出る。

滑らかな漆塗りの文机、瀟洒な紋様が施された椅子、天井から掛

け下ろされた濃い藍絹や薄衣。

身の周りの物は、オノセの趣味で選ばれている。

「まあ、美しいものが一番じゃありませんか。他に、どんな基準が  
ありだと？」

美しく整えた眉をあげて当然のように、こう返されれば、返事の  
しようもない。

「男に生まれたかったわ」

エンジュはむつつりと文句を言う。

「なんてことを。お父君がどれほどあなたに贅沢を許しておいでか、  
ご存じでしょうに！」

オノセは首を振る。

紅や絹に人生のすべてを奉げているとも云える彼女には、到底信  
じがたい言葉なのだろう。

「兄君のように、ここを出たい」

口から出たら、その言葉は真実味を帯びた。

「エンジュ様」

制止の声は、彼女を勢いづけただけだった。

「兄君のように外を見たい。兄君のように学校へ行きたい。

兄君のようにたくさんの友達に囲まれてみたい。

兄君のように買い食いをしたり、いたずらをして宿舎の罰掃除を  
したり、こっそり規則を破って外出したり、……」

言っているうちに、苛々としてきた。

「エンジュ様、駄々っ子の方ですわ。おやめあそばせ」

オノセはふう、と額を押さえてため息をつく。

「ウオン様からいったい何をお聞きになったのです」

ひとしきり地団太を踏むとエンジュは、大きな声で言い募った自

分が情けなくなつて、あーあと肩を落とした。

4つ年上の兄君は、学問の中心地・朱都<sup>シュト</sup>で、貴族の子弟たちが通う学府『緋<sup>ヒ</sup>の学院』に入っている。

長期の休みで、年に数度、この都の本邸へ戻ってくる以外は、会うこともない。

帝の傍で、宰相という重責を務める父君とは違い、肩の力の抜き方を十二分に心得た兄は青家嫡男でありながら、問題児でもあるらしい。

時折思い出したように妹に届けられる便りは、学院で起こした騒動で埋められている。

ちよつとした暇つぶしにと、と風をつかまえる方法を教えてくれたのも彼だった。

『こつやつて、生<sup>イキ</sup>気を送るんだ。ほら、やつてごらん、』  
ちようちよの乗ってきた春風をつかまえて、いたずらっぽく兄は言つた。

体が丈夫でないと侍医に云われ、年中、邸の中で過ごす妹を彼なりに気遣つていたのだらう。

エンジュが見よう見まねに、風に息を送ると、彼はひゅう、と口笛をふいた。

『こりゃ、すごい。生きてるみたいだ』

兄が送つた息は、風をのぼしたり、大きくしてただ戯れるだけだったが、彼女が教えられたようにやると、まるで感情をもつた生き物のように風は声を伴い、その思いさえ伝える存在へと転化した。

青いほのおに変わつた春風は、その光の奥に、黄色い花畑で花をつみとる女たちを映しだした。

粗末な無地の衣と日よけの頭巾をかぶつた平民たち。日々の糧を

得るための、荒れた手。

その周りを飛び交う、ちようちよ、ちようちよ、ちようちよ。  
そして、見渡す限りの黄色い花。

ああ、この花は何と云うのだろう。くると回って、きれいだった。

青い抜けるような空。ああ、明るい。はじめて、見た。もっと、もっと、もっと。

興奮にぼう、となっているエンジュの手を握り、兄は風を解放させる呪文を唱えたが彼女の呼気で縛られた風は、変化しなかった。

『強すぎる、』

と彼は小さく舌打ちをしてから、自分の指先を歯で噛み、血を餌に風を元の姿に戻してから、言った。

『いいか、エンジュ』その声は、低く憂いの響きを含んでいた。

『絶対にその力、あいつに知られてはいけない。絶対にだ』

「あいつ、って誰だったのかしら？」

エンジュは口の中で、呟く。

あの日以来、兄の彼女に対する態度が変化したように思う。

以前と同様、軽い口調と穏やかな物腰、からかう様な仕草は変わらなかったが、時折、困惑にも似た表情がよぎることがあった。

その理由を問いたいと彼女は思う。しかし、まだ今年は兄の帰省が許されていない。

「…エンジュ様、お聞きですか」

彼女は、意識をオノセに戻した。

「何、オノセ」

「お召し替えのお時間にございます、本日はご当主にご挨拶なさる  
予定です」

エンジュは内心で、重いため息をついた。

オノセが5本爪の龍が縫いとられた蒼のとばりをまきあげ、控えの部屋に彼女を通す。

香炉からゆるく煙がくゆり、侍女たちが反対の部屋から装飾品や衣を手に入ってくる。

日に3度の召し替え。

人に会うことがあれば、その数だけ着替えの数は、増えた。

地には極彩色で織られた足元までのオーバドレスの上に、胸の下で、幅が指4本程度の太さの帯を巻きつけ結ぶ。これがこの国の女性たちの一般的な装いだ。

改まった場にでるときは、地の模様がうつる薄物をドレスの上に幾重にも重ねたり、下に織りの違う裾を重ねたりという重ねの色合いを楽しむ衣装が好まれる。エンジュの場合、普段着と言ってもオーバドレスの上に色みの違う青を2枚も重ねている。

貴婦人たる者、たくさんの重ねを着崩れせず纏い、重さも感じさせないよう、優雅に動くことを求められる。貴族の女性たちの日常と云われれば、仕方のないことなのだが、自室といくつかの部屋の行き来のみが平生のエンジュには、幾度もの着脱は煩わしいことこの上ない。

勿論、オノセをはじめ、彼女に仕える侍女たちは、青家のひとり娘である彼女を華やかに着飾ることが誉れであり、当然であるとの認識がある。

それにしても、衣が重い。

エンジュは、銀の腰帯びを結んでもらいながら、思った。

身にまとう絹には、全面に錦糸の刺繍が施されているからだ。頭



ももげるほど、重い。

背を覆う髪は複雑な編み込みで半分ほどが結いあげられ、その上に翡翠玉のついたかんざしを6本差される。

しゃらんしゃらん、と華奢に揺れるかんざしがどれほどの重さなのか、見ている者は考えたことがあるだろうか。

侍女がオノセに水差しを差しだす。

エンジュが水に浮いた花の中から、青い花の蕾を指さすと、オノセが慎重に手に取り髪にさしてくれる。鏡で位置を確認する。

「いいわ、ありがとう」

ほう、と侍女たちがため息をつく。彼女たちのため息は、エンジュのものとは違う。

賞賛であり、感嘆であり、満足の色なのである。

エンジュは背筋をのばし、頭を揺らさないように歩幅を小さくとりながら部屋を出た。

オノセがすぐ後ろを歩いてくるのを承知で、うめき声をあげてみせる。

「服も髪も重い」

「何をおっしゃいます、女は我慢ですわ」  
平然と、オノセが返す。

何を言っても無駄な気がしたので、せめて顔つきに不満を浮かべて、エンジュは廊下を歩く。

幾つもの部屋を通り過ぎ、幾つもの角を曲がる。

「もつと、にこやかなお顔をなさいませ」

「気分が悪いのだから、これが精一杯よ」  
鼻を鳴らして、エンジュは答える。

蠟燭の炎が紙を通して、明るく足元を照らす。昼間なのに、勿体

ないことだ。

夜には、光々と明かりがとる。この明かりの番をするためだけの召使が、邸には十数人もいるのだと、兄君が教えてくれたことがあるのを、エンジュはぼんやり思い出した。

行きかう人々が、脇に控えて頭を下げるなか、エンジュとオノセは、中央を進んでいく。

その時、行く手の角を曲がってこちらへ来るひとときわ美々しい女性の一団が目に入った。

エンジュは、オノセに目配せすると廊下の端へ寄った。

「ごきげんよう、」

一団の中心を進む女性は、エンジュの前で足をとめ、そっけない挨拶を寄こした。

ナルミヤだ。彩模様の扇で顔の大半を覆っているため、表情はほとんど窺えない。

帝の近親にしか許されない黄の絹を幾重にもあわせた衣装。

冠のように飾り玉が額に幾筋も揺れるかんざしは黄金でできており、左側に結いあげた髪は黒く豊かにまとめられている。

白いかんばせは人形のように硬質で若々しく、実際、年齢もリユウカとは姉妹ほどしか離れていない。

美しく整えられた手に持つ扇からは、貴族の女性たちに最も珍重されている百合の香がつん、と匂った。

エンジュは極めて事務的に膝を軽くおった。

「ごきげんよろしゅう、お母上」

この挨拶に、相手はわずかに陰のある眼差しを向けたようだった。

しかしエンジュは気付かぬふりでオノセを促し、歩き出す。  
その背中へ、棘のある言葉が投げかけられる。  
「可愛げのない娘だこと」

十二分に離れて次の廊下を曲がったところで、エンジュは長く吐息をついた。

「お母上は、相変わらずね」

「気になさいませんように」

オノセが慰めたが、エンジュはこうも毎回刺々しく顔を合わせられるのは、避けたいと思ってしまう。

ナルミヤは父君の最も新しい、かつ唯一の妻だ。

現帝の異腹の妹宮である。妾妃から生まれた皇女としては異例の、一品の身分を賜って青家に降嫁してきた。

この婚姻は先帝の遺言だったとかで、当時くちさがない年配の侍女たちなどは、父君がナルミヤをめとる為に先妻たちを呪い殺したのだ、と噂した。

まだ年若く気位の高い姫宮と、エンジュとの親娘関係は、そんなわけで最初から芳しくない。

それでも同じ邸に過ごすようになって、6年が経とうとしている。

「3週間ぶりだわ」

エンジュは、オノセに苦々しく呟く。

父君とは、もっと会っていない。ともすると、顔さえ忘れてしまっ  
いそうになる。

挨拶の時間を意図的に作らねばならないほど、彼女の家族関係は  
希薄だ。

父君は、エンジュだけでなく一人息子の雨音ウオンにも全くと言ってい

いほど、関心を持っていないようだった。

回廊を出ると、よく磨かれた青石で敷かれた玉砂利が広がる庭園に出た。

青家の本邸は石庭で名高く、雨が降ると琴をはじくような音が響く。

代わりに、花や木など生きたものは配されていない。

都の喧噪のなかにあるとは思えぬほど、硬質で静謐な邸である。

屋根つきの東屋を結ぶように舗装された小道がゆるやかに延び、エンジュは歩調を落としてオノセに並んだ。

「父君はいつお戻りに？」

エンジュは話しかけた。

「一昨日、とうかがっておりますが」

「皇宮から？」

「そのようですね」

オノセは答えながら難しい顔つきで、考え事をしているようだった。

「先ごろ、西家を通じ、和約のための隣国の使者が到着したとか」

「西家？」

ええ、とオノセはうなづく。

西家は、文字通り帝国西部を治める大諸侯だ。

東を治める青家とは同格の『大公』の位を与えられている。

本家である白家は、とうの昔に断絶しており、今はその流れをくむ12の分家が持ち回りで当主の座に就いている。

西と言えば、半島で国境を接するグルジム力である。

屈強な騎馬軍、圧倒的な行軍力で周辺国を脅えさせる、巨大な軍事国家。

長年、帝国とは戦火を交えてきた相手だ。

「和約？」

意外な響きにエンジュは首をかしげた。

積雪のための中断はあっても、停戦や和約などという言葉は、好戦的なグルジム力が使うことなどない。

「国境の砦から出撃した我がほうの少数部隊が、奇襲によってグルジム力の騎馬軍を壊滅せしめた、と聞きましたわ」

奇襲。エンジュは確かめるように、くりかえした。

奇襲とは、騎士の風上にもおけぬ策。

その策をとらねばならぬほどの不利な戦であったということか。

エンジュは胸に痛みを覚え、頭1つ分背の高いオノセを見上げた。

「勝ったの？　和約の条件は、」

エンジュの問いに、オノセはめずらしく逡巡してから口を開いた。

「西家の公女と、グルジム力の王太子の婚姻。および、捕虜の交換です」

「西家の？」

皇族や王家の姫ではないのか、と尋ねるエンジュに、オノセは説明を加える。

「おそらく、こちらの国情をくन्दの申し出だと思われますけど」

帝国は今まで、皇女を異国へ嫁がせたことがない。

それで、国境を接する西方諸侯の娘を、ということか。

「騎士たちが無事でいると良いけれど」

「姫、」

エンジュは、この条件から勝利ではないことを悟った。それでもここでは、負けたと口にすることはできない。オノセが眉根をよせる。

「彼らが無事に帰還することを祈りましょう」

二百数十年の長きにわたり、この国の中央政治を牛耳ったのは、『国首の君』と呼ばれた青家の一族であった。

国を閉ざし、和をもって統治しようとした代々の国首たち。

しかし二百年もたたぬうちに、汚職と暗殺が横行し、内側から腐っていく果実のように、政情は悪化の一途をたどった。

変革が叫ばれる中、20年前、先代国首は政権を再び、お飾りだった帝のもとへ戻したのだ。

一見落ち着いたかに見える帝国の内実は、内部の瓦解と並行し、外部からの侵入に悩まされ続けている。

呪術と異能の少数集団で国の根幹を支えてきたが、それもこれ以上続くかどうか。

特にここ数年は国境があわただしく、西方地域をあずかる白家の一族は苦しい負担にあえいでいる。

「このままでは、西から帝国は崩壊するでしょうね」

エンジュは、強く言った。

オノセは、慌てて彼女の口をふさぐ。

「し。どこに耳があるかしれません」

「かまうものか。ここにいて私が何をできるというの」

「父君は何と？」

「わたくしには、分かりかねます…ただ、手をこまねいておられる

わけではありますまい」

表で取次をすることも多いオノセは、父君の置かれた政情をおぼろげながら描くことができるのだろつ。

ため息をつく。

「たとえ今は『宰相の君』とはいえ、総ての権力を手にしているわけではありません。それよりも」

オノセの口調が変化する。

「エンジュ様、幾度も申しあげておりますように、力を使って厄介なことに首をつつこんではいけませんよ」

「厄介なことつて？」

「あなたの趣味の、例ののぞき見です」

ずばりと言われ、エンジュは口をとがらせた。

兄君から教えてもらって以降、風をつかまえて外の世界をのぞいていたのをオノセは知っていたらしい。

「迷惑はかけてないわ」

「必要のない力をお使いになることが、迷惑というのです」

いつもの繰り言だ。

オノセは、どんな簡単な術であってもエンジュが異能を使うことを嫌がる。

なぜ、と訊いてもはぐらかされるばかりだ。

エンジュは分かった、と頷き、それきり会話は途絶えた。

しばらく進むと翠の玉で屋根を敷かれた壮大な建物が、姿を現す。ここは父の居宮、すなわち「表」だ。

長く広い大階段を登りきると、侍従が進み出て、オノセに耳打ちする。



階でとめられるなど、普段では考えられない。

エンジュは横目でオノセの表情をうかがったが、その白い顔に何の色も読めなかった。

しばらくして二人は奥から出てきた別の侍従の案内で、当主・青<sup>セイ</sup>龍<sup>リュウ</sup>が私的な応接に使う部屋の前に立った。

ここからは、エンジュひとりだ。

「父君、エンジュです」

低く応えが返り、エンジュはなかへ入った。  
額の前で両手を組み、膝を軽くおり礼をとる。

「やあ、これは大した貴婦人ぶりだね、エンジュ」  
明るく、屈託のない若い声を聞いて、彼女はまさか、と顔をあげた。

そこには、1年ぶりに見る兄の姿がある。ゆるく波がかった髪が肩まで届いているのと、身長がずいぶん伸びたような気がする以外は、去年のままだ。

彼は長椅子から立ち上がり、にっこりと笑った。

「兄君！」

「ただいま」

彼女は父の部屋だということも忘れて、歓声をあげ、兄に抱きついた。

「そんなに歓迎してくれるなんてね、僕も帰ってきたかいがあるつてもんだよ」

と、彼らしい軽口で妹の手を取って「ねえ、父上」と振り返った。

「雨音、  
ウオン」

冬の朝の池にはった氷のような声音で、父君が呼んだ。

彼は、良く磨かれた黒くて立派な卓の前に、座っている。右の脇には、書類の載った盆を持って書記官が立つ。

エンジュが見慣れた、ここのいつもの風景だ。

「なんです?」

父の声音にも、兄は自分のペースを崩そうとはしなかった。

父君は、左の眉をぴくりと動かした。これは、彼が気に入らないときの仕草だ。

エンジュは、父の叱責を予期して体をこわばらせた。

「下がっていい」

だが、父は息子に対してではなく、側の書記官に静かに言った。

壮年の書記官は目礼すると、家族を残して退出した。

彼が出ていくと、兄君はまるで嘘のように笑顔をひっこめ、エンジュの手をするり、と離れた。

そうして苦々しげな表情で、長い手足を投げ出すように、椅子に深々と座りこむ。

「さあ、はやく聞かせてくださいよ。なぜ、貴方の前に兄妹揃って居るのかをね、父上」

「兄君」

エンジュが雨音に咎める視線を送れば、父が「おや、」とわざとらしく、彼女を見つめた。

初めて、娘がそこにいることに気付いた、とでもいう風に。

父君は静かに、机の上で両手を重ねる。

その左手の中指には、5本爪の龍が彫られた銀細工の指輪がはまっている。青家の当主・青龍セイリョウのあかしである。

龍の目に使われているのは、さすように蒼く輝く2対のダイヤモンドだ。

この宝石には特別な力が宿っていると伝えられ、自ら持ち主を選ぶという。

右眼は『氷涙<sup>ヒルイ</sup>』、左眼は『流呼<sup>リュウコ</sup>』と呼ばれている。  
今は「流呼」が嵌っていない。

父君が最後の国首の座を帝に返還した時、離れたという。  
エンジユはいつも、目を見ることができなくて、指輪の嵌った父君の美しく女性的な手に視線を落としてしまう。

父君の声が落ち、エンジユは顔をあげた。

「四宮<sup>シミヤ</sup>が、神殿より戻ってきた」  
青龍は、微笑をうかべている。

不満げに結ばれた兄君の口がぴくりと動いた。

「皇太子が内定したのですか、」

「そうとは言っていない」

「では」

「確かに彼は、有力だ。お前もいずれ任官しよう。その目で、見た  
いかと思つてな」

父君は、造作の良く似た息子に視線を投げる。  
背に流れる波立った髪も、神経質そうな眉も、高く整った鼻梁も、  
広い額も、うすく引き結ばれた唇も、雨音が年をとればかく、とばかりの類似。

2人の圧倒的な違いは、ただ体にまとう力の差である。  
溢れんばかりに立ち昇る父の異能に対して、兄のそれは仄かに体に  
まもっているに過ぎない。

「いずれ、であつて、今ではありませんよ」  
「しかし、見極めねばなるまい」

邸の奥からほとんど出ることのないエンジュには、一体、父と兄が何を話しているのか、深くは分からなかった。不可解な表情が面に浮かんだのだろうか。父君は不意にエンジュに目をとめた。

「ときに、そなた。幾つになった？」

「…16です」

困惑しながら、こわごわエンジュが答えると、青龍は一瞬、安堵とも苦みともつかない曖昧な表情を浮かべた。

「エンジュの年が、いかがしました？」

兄君が先を制するように父に尋ねる。

父は兄に視線を戻すと、娘の顔も見ずに言った。

「嫁がせる。ハクオウ白桜家の嫡男だ。そう悪くはあるまい」

「それは、…決定なのですか？」

エンジュの声が自然と震える。

「不満か、」

青龍はエンジュに視線を戻したが、その顔に感情らしきものは浮かんでいない。

彼女は直ぐ首を振った。

「いえ、ただ…」

しかし、突然のことに、口を開いたはいいが何を話しているのかわからず、結局、もう一度首を振って黙った。

「父上、そのような話は」

と兄が抗議の声をあげたが「反論は許さぬ」との父君の一言に押し黙る。

まさに寝耳に水とはこのことだ。

長い沈黙が落ちる。

リュウカは唇をかみしめた。父の考えていることが知れない。

「どのような相手か聞かないのか」

しばらくして雨音がエンジンジュをうながしたが、彼女は直接それには答えず、棒のように強張った足を前にすすめ、父君と黒い机を挟んでむきあった。

「嫁げば、おのずと知れましょう　父君、」

「何か」

「父君は西家に、いえ、敵国グルジムカに譲歩したのですか」

「父君は西家に、いえ敵国グルジムカに譲歩したのですか」

そのひと言に青龍の表情が一変した、と思つた途端、ごおつ、とエンジュの体を黄金の炎が包み、芯からもえあがる激痛が彼女を襲う。

あつい、あつい、あつい、あつい、あつい、あつい！  
もえている！！

「父上！！」

慌てたような兄君の声が聞こえ、ああ、父君がお怒りになつたのだ、とエンジュは痛みに崩れそうになりながら、思つた。

この業火は、父の放つた力だ。

「せいぜい、婚家ではその口のきき方に気をつけるがいい」

父君はそう言い捨てると、椅子から荒々しく立ちあがり、部屋を出て行つた。

エンジュは父の退出と同時に膝から崩れ落ち、心の臓を焼く熱さに床をのたうちまわつたが、けつして悲鳴を上げまいと奥歯をくいしばる。

目じりから涙がこぼれた。

何分激痛に耐えただろう、次に意識がはつきりしたときには、彼女はオノセの腕の中にいた。

火は見えない。

ほっと息をつき、ぼんやりと目元をぬぐうと焦点がはつきりし、オノセの顔が見えた。

いつもの美しい顔が涙で汚れている。

傍らには、兄君とコウヒの姿もある。

兄君は、口もとをひき結んで感情をこらえているようだ。

「…コウヒ、来てたの」

声をかけると、赤い目でエンジュを覗き込んだ。

怒りのような、悲嘆のような複雑な色が浮かんでいる。

「青龍さまに何をおっしゃったのです？」

「父君は、グルジム力に屈したのか、と聞いた」

エンジュは軽く笑ったつもりが、喉の息がひゅうひゅうと鳴って、あえぎ声のようになってしまう。

体に力を込め、半身を起こすと、びりびりと皮膚にこするような痛みが走る。

特に、むきだしになった両の手が痛い。手の甲を確認すると、肌が赤く染まっていた。

鬱血している。

「なんということを、」

コウヒは呻き声をあげたが、エンジュは意に介さなかった。

両手をとられ、低い声でオノセが癒しの呪文を唱えているのをぼんやりと聞く。

このあたりで済んで、幸運だった。兄君がかばってくれたのだろう。黙って膝についている雨音に目を向け、エンジュは謝った。

「兄君、心配をおかけしました」

「…全く。寿命が縮んだ」



彼はいつものように、片手でエンジュの頬に軽く触れてくる。鼻に、かすかに腐臭がついた。

エンジュは、まさか、と兄の反対側の袖口をぐい、と引っ張った。布のぬめるような感覚に、やはりと納得する。腕に走る一筋の傷口。まだ、鮮血がにじんでいる。

「血をお使いに？」

「…少しな。お前が気にするほどじゃない」

そうは言っても、手首から肘にかけて伸びた傷では、相当の血を贖ったに違いなかった。

兄の青い顔を見ながら、エンジュは「ごめんなさい」と再び詫びる。

ただ、知りたいことは知れた。父は、先の西部戦線での大敗、あるいは失策を知っている。

そして、どうやら、グルジム力に譲歩しなければならない状況に追い込まれているらしいということも。

「すまない、お前の盾にはなれなかった」

父の力は強大で、到底僕は及ばない、と雨音が静かに言い、エンジュはその声の響きに胸がつかれるような痛みを覚えた。

『血を用いるのは、最終手段です』

神から与えられた異能という恩寵を制御するために、エンジュは幼いころからそう繰り返し、繰り返されてきた。

力を持った大量の血はまた、邪気をも呼びよせ、果てには持ち主をのみこんでしまう、と。

勿論、兄君も同様であるはずだ。

辺りには朽ちる寸前の花のように甘い匂いが漂い、兄の血を媒介とする術だと知れたが、その他にも、多数の術の残り香が鼻をつく。兄の『声』や『息』では、父の術に太刀打ちできなかったらしい。雨音は、黙ったままのエンジュに視線を転じた。

「申し訳ございません」

と、オノセがうなだれる。

「お前を責めてはいない」

「ですが、」

「いい、僕が側にいたんだから」

オノセはエンジュの教育係として、この状況に、責任を感じているらしい。

だが、雨音はそれには頓着せず、ふっと嘆息する。

「この程度ですんで、まだ良かった」

それより聞きたいことがある、と雨音は強い口調で言った。

オノセは顔を強張らせたまま、頷く。

「… 皇宮のことだ。僕は学院から戻ったばかりで情報が不足している」

「神殿から、皇子が戻られたというお話でしょうか？」

「そう。父上は見極めるとおっしゃっておられたが…」

「帝の希望であらせられる、とは聞いたことがありますけれど」

「不可解だ…」

オノセの返事に、うーんと雨音は唸り、顎に手をやってしばらく考えこんでいる。

そのとき、外から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「若、そろそろお時間です」

「分かった。すぐ行く。オノセ、君も来てくれ」

雨音は扉に返し、床に座り込んだままのエンジュに向き直った。

そのおもては、軽薄な普段の調子とは全く異なっていた。

「僕が言うべきは、1つだ。

父を怒らせるな」

僕ではお前を助けてやれない。

そう言って立ち上がると、エンジュとコウヒを残したまま、振り返らずに扉の外へと消えた。

コウヒは口をぎゅっと結ぶと、黙ってエンジュを立たせた。

帯を解いて多少汚れた上着を脱がせる。

重ねを2枚も脱げば、随分身軽になった。ふたたび帯を簡単に結びなおした。

スカートを直すと、足元にかんざしの花が落ちているのが目に入った。

いつの間に踏んだものやら、花びらが割れ、破片が飛んでいる。

「兄君は悪くないわ」

エンジュは手伝おうと手を伸ばしたコウヒを制し、乱れた髪からかんざしをひきぬいて、手早く髪をすく。

編み込みを解いて頭を振ると、背中へゆるく髪が滑り落ちた。

重さと痛みに解放され、エンジュはようやく顔に表情が戻るのを感じた。

「コウヒ、私、結婚するんですって」

コウヒの顔が再び凍るのを見ながら、続ける。「西家に」

「どなたにですって、」

コウヒの悲鳴のような声に、エンジュは肩をすくめた。

「別に、それで父君に逆らったわけじゃないわ」

「勿論です。それにしても…西家のどの家です?」

西家白家は、血筋が絶えて久しい。現在はその流れをくむ、<sup>ハク</sup>12

の分家が西方諸侯連合という形をとって、西部地域を治めている。  
家同士の争いと権力集中を防ぐために、独特の慣習で当主・白虎ハクオウの地位を守っているのだ。

それが、『白虎の地位は、持ち回りの7年任期』というものだ。

「白桜ハクオウの嫡男だったと思う。悪くはあるまい、とおっしゃったわ」  
「それは、…しかし」

コウヒの微妙な反応に、リュウカは心配になってきた。  
もとより、青家の娘に生まれたからには、政略結婚など覚悟の上だ。

家格と政治的配慮の上、嫁ぐことが生まれたときから運命づけられている。

「もしかして、…すごく年上とか、たくさんの奥方をお持ちだとか、醜男だとか」

「ご存じないのですか、」

「何が？」

ああ、とコウヒが大仰にため息をつく。

「あなたはきつと、宮廷では生きられませんか」

オノセの苦勞が手に取るように分かります。

各々の家の因縁や家族構成、地位や財政状態を頭に入れておくのは、貴族としてのつとめだ。

生きる術なのだから、と常々オノセはエンジュに言い聞かせていた。

普段の勉強が全くエンジュの身になっていないことを知って、コウヒは天をあおぐ。

「兄君もその点、あまり世渡りがうまいとは言えないわ」

口をとがらせて、エンジュは自己弁護した。「私は、いいのよ。だって、あなたやオノセがいるもの」

口元を引き上げると、にっこり笑う。

「それで？」

コウヒはため息をつき、

「私はもとより、オノセが嫁ぎ先までご一緒できるかは、わかりませんよ」

と言おうとしたが、結局口にはせず、エンジュをうろんに見返した。

「確か現在の白虎は、蘭<sup>ラン</sup>家がついでいます。私の記憶に間違いがなければ、白桜の公子は、蘭の公女と婚約していたと思いますわ…。

血の近さから帝が洩られたのを、神殿のとりなしで許されたとか」「じゃ、わたしは二号さん、てことかしら」

「まさか！」

コウヒは鼻白んだ。「青家の公女が！万が一にも起こりえませんが歴史ではあったわ、とエンジュは心の中で反駁する。

青家が帝に代わって国首の座に在り、並びない権勢をふるっていたところでさえ。

氷姫と呼ばれたサテや、大公女の位を剥奪されたナユタを、歴史学者の卵であるコウヒが思い至らぬはずない。

しかし、エンジュはそれを指摘しなかった。別の考えにとらわれたためだ。

「コウヒ、なぜ白桜なのかしら」

父君の怒りを考慮に入れば、西家の騎士たちは善戦はしたたろ

うが、戦火に散つただろう。

なのに、父君は西家にエンジュをやるという。しかも、現白虎の家族ではない。

何が、父君を決心させたのだろうか。

エンジュは、父の使える唯一の娘である。

そう安売りするとも思えないが。

「何かありそうですわね」

「…お母上はどうかしら？」

コウヒに提案してみる。

こちらへ来るときに、鉢合わせしたということは、ナルミヤも父に会ったに違いなかった。

「それで？わたくしに聞きたいことは、」

まさか、入室を許されるとは思わなかった。

コウヒとしては、ナルミヤの居住する東殿で侍女たちに少し話が聞ければよかったのである。

ナルミヤの居室に案内され、椅子をすすめられ、皇女にお茶を振る舞われるとは思ってもみなかった。

湯気の立ちのぼるカップに口をつけて、初めて嗅ぐ異国の香りに瞠目する。

「これは、」

「どうだ？気に入ったか？」

ナルミヤは口元を引き上げて、ほほ笑む。

そうすると、彼女は廊下で行きかう印象より、ずっと、若々しく見えた。

そういえば、この方はまだ30歳にもなっていないのだ、とコウヒは思い返す。

「はい、とても。大陸東部からの舶来ですか？」

「ああ。近頃は異国のものを容易に手に入れることができるようになった」

穏やかなオレンジ色をした飲み物に、ナルミヤは目を細める。

コウヒは、そういえば、と部屋に目をやった。

四方の壁全面に掛けられた刺繍の壁掛けは、よく見れば幾何学模様で、染めの色づかいから、帝国のものではないと分かる。

今、自分たちが座っている椅子も、目の前のテーブルも、飾り戸



棚も。

「わたくしに尋ねても、お前の欲しい答えは得られぬだろうよ」  
ナルミヤはコウヒを見つめながら、そう言った。  
2人きりで、これほど近い距離で話するのは初めてだった。

目じりを赤く引いた一重の瞼は、ナルミヤをひときわ近寄りがたく見せる。

額の中央に描かれた赤い花びら模様は、皇宮の女性独特の化粧だ。  
ナルミヤの降嫁に際しての条件の1つが、嫁ぎ先でもこの宮風を通すことであつたという。

「奥方さま…」

「ああ、それはやめよ」ナルミヤは気分が悪そうに首を振る。

「その呼び方は好かぬ」

「申し訳ありません、宮様」

「あれの婚約のことだろう？先ほど、わたくしも青龍から聞かされたところ。上は承諾なさるまいと、わたくしは言っておいた」

「帝が？」

なぜ、帝がエンジュの婚姻に関心を示すのか。

コウヒの問いかけるような表情を読んだのだろう、ナルミヤは分らぬか、と苦笑った。

「あれの継ぐ血を考えてもみよ。西の辺境だと？いらぬ騒乱を招くわ」

「エンジュ様を、…ご心配くださっているのですか」

まじまじと皇女を見つめてしまう。

エンジュとナルミヤの仲の悪さは、周知の事実だった。

一緒に訪ねよう、と言ったコウヒに、エンジュが返した言葉がそれを示している。

『わたしは、あの方に嫌われているし。行っても会ってくださらないでしょ』

正確には、会ってくれないではなく、会わないようにしている、だ。

エンジュは、ナルミヤの居住空間に接触しないように、出遭ったときは叱責を受けないよう目を伏せている。

何が厭というのではない。初めて挨拶を交わした時から、ナルミヤは刺々しい態度だったらしい。

思い出したくもない、とエンジュは言う。

「わたくしが？」

まさか、とナルミヤは紅い唇を1度歪めた。

「傍にはそなたやオノセがついておろう、」兄もおれば、父親もある。

「わたくしは、あれの母にはなれぬ」

母というほど年もはなれておらぬし。

ナルミヤはカップを口に運んだ。

その洗練された手つきと、染み1つない白い手が、何よりも雄弁に彼女の立場を語っているように思えた。

「では、なぜ私をここに？」

「なぜであろうな……」

コウヒの疑問に、皇女は面倒だともいいたげに、首を振った。

「エンジュは好かん。聡いわりには、頑固で若い。ゆえに、危うい。しかし」

それをそなたに、言いたかったのかもしれない。

ナルミヤは、ふ、と息を落とした。

これほど側に寄りながら、コウヒはナルミヤを覆う異能を殆ど感じないことに、ふと気がついた。

『帝が、国一番の術者である』とされるこの帝国において、皇族にこれほど力が感じられないのは珍しい。

コウヒは、まじまじとナルミヤの枯葉色の瞳をのぞきこんでしまふ。

「それに」

とナルミヤは言った。

「それに？」

繰り返したコウヒに、そなたには分らぬであろうが、と穏やかな声のまま告げる。

「わたくしも現状に甘んじているわけではないのだ」

ここ帝都の冬の到来は、貴族たちによる華やかな祝宴によって幕をあける。

冬のシーズンを祝う催しが離宮で行われると聞き、兄君はエンジュを伴って参加することに決めた。

エンジュの婚約は既に3週間前に公示され、雪で馬車が動けなくなる前に西家の拠点、彩白<sup>サイハク</sup>へ向かうことが決定していた。いわゆる足入れ婚である。

今夜の祝宴で、エンジュは非公式にはあるが、帝に謁見し、婚姻の認可を賜ることになっている。

父は接見役を、雨音<sup>ウオン</sup>に総て任せると言って、出てこようとはしない。もちろん、ナルミヤもだ。

エンジュは、朝も早いうちから、長時間大鏡の前に座らされた。

髪に香油を塗られたうえ、たんねんにくしけずられ、細やかに編まれていく。

侍女に渡された手鏡でエンジュが後方の髪型を確認していると、背の高い兄君がさっそうと入ってくるころだった。

「エンジュ、どうだい？用意は」

そう言うなり、彼はしばし我を忘れたように、鏡越しに妹の顔を見つめた。

エンジュが首を傾げると、雨音はああ、と息をつく。

「本当に綺麗だ、エンジュ。これならば、どんな美姫も顔をなくすだろう。なあ、リド」

戸口を振りかえると、笑みを浮かべながら1人の青年が部屋へ入

つてくるところだった。

「あきれるほどのシスコンぶりだね、ウォン」

「まあ、リドお兄様！」

久しぶりに会う母方の叔父に近づこうとしたが、長い裾に足をとられ倒れそうになった。

とっさに、伸ばされた手にすがりついて態勢をもどす。

「気をつけておくれよ、エンジュ」

「ありがとう、リドお兄様」

どういたしまして、会いに来てくれて嬉しいわ、私も嬉しいよ、と会話が続いたところで、横から不機嫌な咳ばらいが聞こえた。

「妹から離れろ、リド」

「何を怒ってるんだい？君は」

「何も」

むっつりと言う雨音に、リドは苦笑いをしながら、距離をとった。リドは叔父とはいっても、乞われてエンジュの母の実家へ養子に入ったもので、直接的な血縁関係はない。

『緋の学院』では雨音の学友でもあり、今日はエンジュたちと共に参内するという。

彼自身、既に伯の位を賜っており、若輩ながら領地もあずかっている。

「ここへは遠慮しようと思ったのだけだね。どうしても、ってウォンが言うから来てしまったよ」

エンジュの頬に片手を添え、にっこりとカラは笑いかける。

もう一方の手には白い小花がぎっしりと詰められた籠が握られている。

「それは？」

「贈り物だ。君へ」

エンジュは差し込まれた籠を受け取る。

粉雪のような花は可憐で、まだ朝露が残っていた。

きれい、と声を出さずにつぶやく。

リドは瞳をすがめるように笑みを刻んだ。

エンジュはその顔を眩しそうに、見上げる。

白晳で線が細く、いかにも貴公子然としたリドは、プレイボーイとしてあちこちで浮名を流しているのだと、兄君はしきりにエンジュに語って聞かせていた。

「でも、私にまで、こんなことをしていただかなくてよかったのに」

「え、」

と尋ね返すリドと同時に、雨音が何かをこらえるようにせき込んだ。

ひと息、沈黙したカラは意味を理解するに及んで、ちらりと友人に目をやる。

「…へえ」

「おいおい、なんだよ。その目」

「エンジュ、教えてくれるかな。ウオンはなんて言ってるの？」私のこと。

口元を引き上げて穏やかそうに微笑んでいたが、目は笑っていない。

エンジュは雨音を見たが、兄は決して彼女と目を合わそうとしなかった。

戸惑うエンジュが、リドに視線を返す。

「もしかして、こんな風に？」

と、リドは彼女の耳元に顔を寄せて囁いた。

そして、頬にかすめるような口づけを落とす。

額で分けた長い黒髪が揺れ、離れるときにリドの香がにおった。

「おい！！」

兄が顔を上気させて怒鳴った。

ふふ、とリドは軽く笑う。

「君の、その顔ったら……。第一、その花は私からじゃないよ。邸の前で言付かったんだから」

からかわれたと知って、いつそう雨音は顔を赤らめる。

「お楽しみのところ、申し訳ありませんけど、時間ですわ」

戸口に、コウヒが立っていた。

耳元で2つに結いあげた髪は豊かで、額をかざるクリスタルがきらきらと輝いている。

エンジュがどうしても、とお願いして、今日はコウヒにも参加してもらったのだ。

「やあ、コウヒ。いつもながらきれいだね」

リドが近づき手を伸ばしたところを、コウヒはさっとよけてにっこり笑った。

「いつもながら齒の浮くようなセリフですこと」

「あなたしか、見ていないからね」

「まあ、お上手」

リドの言葉に感情をこめずに答え、コウヒは、エンジュに提案する。

「少しさびしいわ。しあげに、髪にその花を飾ってはどうかしら、」

エンジュが大鏡ごしに、リドを見る。

「それは」

と声を濁す雨音に被せるように、「まあ、よい考えですわ」と侍女たちが口ぐちに歓声をあげる。

「贈り物を身につけて、あちらで出会われるんでしょう？ ロマンチックですこと」

「あなたたち、すこし騒ぎすぎですよ」

オノセは若い侍女たちにそう注意してから、エンジュを椅子に座らせる。

「この花は使ってもよろしいのでしょうか？」

リドに確認をとる。

花の送り主が、エンジュの立場に不利に働かないかと聞いたのだ。彼がうなづいた上で、オノセは籠から花を摘んだ。

編まれた髪の間際に、挿しこみ飾っていく。

「さ、できました」

オノセが少し離れた位置から出来栄を確認し、エンジュが雨音に手をとられて立つと、コウヒは頷いた。

頬を薔薇色に染め、白桜から婚約の祝いとして贈られた絹で仕立てられた白いドレスを身につけ、ゆるく波立つ長い髪に花を散らした少女の姿は、清楚な美しさで、まるでおとぎ話に出てくる精霊のように見えた。

「変じゃない？」

「まさか、」

完璧だ。そう雨音は言うと、侍女たちに扉を開けさせる。



「用意はいい？」

「ええ」

エンジュをエスコートする、誇らしげな雨音の横顔を見ながら、リドはコウヒに腕を差し出した。

「私たちも行こうか」

「はい」

コウヒが前をゆく兄妹に気がかりな視線を投げるのを見て、「君も複雑な心境だね？」とリドは囁く。

コウヒはそれには、一切答えず、ただ背を伸ばして美しい笑顔を見せた。

離宮の車寄せに馬車を止め、おりたつたエンジュたちに、恭しく案内役が灯籠を持って、広間への道を示す。

今宵は離宮の人工池の上に設けられた大きな棧敷を幾つもつないだ屋形を会場として、宴が開かれるらしい。

護衛たちのかかげる松明の向こうに、ひしめき合う馬車が見える。

雨音は、「ご覧」と指をさす。

それほどの数の貴族が集まっているということだ。

「近隣国の商人、外交官なんかも来ているんじゃないかな」

リドが呟くのを、コウヒは耳に留める。

不意に、部屋を外国の物で取り揃えたナルミヤの顔が浮かんだ。

「帝は、外国トクニに開かれた心をお持ちなのですね」

「まあ、国をひらくことを推し進められた方であらせられるからね、

」

エンジュも雨音もまだ生まれる前の話だが、この国は長く鎖国政策をとって閉塞状態にあり、それを政変によって打開したのが、当時即位8年であつた今の帝であつた。

「リドお兄様、異国の方を見ることはできるの、」

「そうじろじろと見ないでくれよ」

まあ、そんな行儀の悪いことはしないわ、と頬を膨らませるエンジュに、笑ってカラが言う。

「君に見つめられたら、勘違いしてしまう輩が出るかもしれないしね」

「そんなことにはならないわ。だって私、あと1月もすれば、西部へ嫁ぐのよ」

世間話をするかのようにあっけらかんとエンジュが答えれば、雨音が眉間にたて皺をつくり訂正する。

「エンジュ、嫁ぐのではない。お前は約定のため、西家へ居を移すだけだ」

「あら、どう違うの、」

どうせ、1年もすれば正式に婚姻を結ぶことになるんでしょ。

言い返したが、エンジュにも分かっている。

状況が変われば、彼女は白桜家の婚約者から人質となる。

あるいは、婚約は白紙となり青家に戻ることになるだろう。

最悪の場合、命で約定をあがなうことになるはずだ。

父君が交わした内容がどんなものなのか、知ることはできなかったけれど。

「ウオン様。約束をお守りくださいませ」

コウヒが釘をさすと、雨音は不機嫌そうに口を引き結んだ。

剣呑な視線をコウヒに投げたが、静かに視線が交わるに及んで、ふいと視線を外す。

リドはそんな友人を興味深そうに、じっと見つめていたが、不意に吹き出した。

「ああ、ほんとうに。なんて顔をしてるんだい、ウオン」

「ほら、行くぞ。もうそこだ」

ウオンが仏頂面でエンジュの手をぐいぐいひいて歩を速めると、リドは苦笑しながらコウヒと続いた。

エンジュのすぐ後ろで、リドの笑う気配がする。

石の続き回廊からよく磨かれた漆ぬりの橋を渡ると、棧敷についた。

まるで、昼間のように光々と明かりがともされ、水面をきらきらと反射する。

先の広間からは、軽やかな音楽と談笑する幾たりもの声が華やかに耳に入ったが、リドによれば皇宮で催される祝宴としては、規模の小さなものであるという。

「招かれた面々も、それほど重みがあるとは言えない。若者が多いし、皆、軽装だ」

リドが囁いたのが耳に入ったが、初めて夜会なるものに参加するエンジュにとっては、比べようがない。

「父上がお前のためにこの席を選んでくれて、良かった」  
雨音も言った。

4人は、鏡と蠟燭で照り映えるシャンデリアが吊られた広間へ足を踏み入れる。

入り口では侍従が朗々と口上を述べ、広間に入る客人たちの名を紹介した。

兄も修学中であり、このような場には慣れていないはずなのだが、そういうことを全く感じさせない、堂々とした身ぶりだ。

1の広間の奥、次の広間へ向かって、ゆったりと進みながら、知己の貴族に会えば軽くお辞儀をし、声をかけられれば和やかに挨拶を交わした。

エンジュも名を問われたら微笑んで答え、失礼にならないほどの

挨拶と世辞を受けることを繰り返した。

2つ目の広間の中ほどまで来たとき、いつの間にか、コウヒとリドが消えていることを知る。

視線で2人を探すエンジュに、雨音は耳元で言った。

「2人になら、後で会える」お前の挨拶が終わったら。  
その言葉に、エンジュは今日の目的を思い起こした。

それにしても、贅を尽くした夜会であることは、脇に並べられたテーブルのとりどりの花々や飲み物の豊富さ、珍しい食べ物にも見て取れる。

いよいよ冬も到来だと云うのに、溢れんばかりの花の数には、贅沢を知るエンジュでさえ、驚嘆してしまう。

高い天井からは、織りの美しい紗がいくつも流れており、テラスの明るさを調整している。

立食を楽しんだり、カウチでくつろいだりする着飾った人々の波を、2人は幾度も通り過ぎた。

「　　ですか、姫君？」

「え？」

ぼんやりと意識を戻すと、赤いケープを身につけた明らかに外国の者と知れる壮年の男が、エンジュの返事を待つように目を覗き込んでいる。

「すまない、妹はこのような席が初めてなものでね」  
少し緊張しているんだ。

雨音が苦笑い、謝った。

エンジュは兄の言葉に赤面し、慌てて返事する。

「失礼しました、今なんと、おっしゃったのですか、」

「初めてでしたか、これはこれは……。今夜のお召し物は、サイハク彩白のも  
のですか、とうかがったのです」

いや、わたしは織物の商売を手掛けておりましてね。

染めが余りにも美しかったものですから、と言う。

大陸南部に特徴的な舌を巻いた発音が珍しい。

遠くイスアンという国から来たというその商人は、しげしげとエンジュを、いや彼女のドレスを見つめた。

エンジュは首を傾げた。

自分が今まとう衣は、白無地で、ドレスとして仕立てるときに刺繍はしただろうが染めていない。

彼女がそう告げると、男と一緒に兄までもが笑った。

「エンジュ、その衣は薄く鈍色の光沢を持っているだろう？」

蚕から糸を紡ぎ、特別な木から得られる液で染めた白だ。この国の……いいや、西でも一部の者しか身につけられない」

チヨウジョウハク

蝶丈白、というのだと、教えてくれる。

確かに、羽化した蝶が初めて翅を広げた時のような、濡れたような薄い鼠色に近い、えも言われぬ美しい光沢を放っている。

製法は口伝で、代々の職人たちしか知らないという。

「そうですか、これがかの……。わたしも、初めて見ました」

「妹は近々、十二西家へ嫁ぐことが決まっていますのですよ」

ああ、道理で。と雨音と男との間で、笑みと頷きが交わされる。

「おめでとうございます、姫君」

「ありがとうございます」

エンジュが作法通り、軽く膝を折ったところで、雨音に腕をとられる。

「では、これで」

雨音は口元に笑みをつくったまま、エンジュを連れて歩き始める。兄の笑顔が嘘ものだ知っているの、「どうなさったの、」と尋ねた。

「どうもしないさ」

「怒っていらっしゃる？」

「いいや、エンジュ。彼は確かめただけだ」

何を？と問う妹に、彼は唇を皮肉げに歪めた。

「噂を、だよ。青家の公女が婚約したと聞いて、本当かどうか確かめに来たのさ」

いかにも商人らしい方法でね、と付け加える。

「でも、わたしの婚約はおおやけにされたはずでは？」

「帝が認めなければ、貴族のどんな関係も許されることはない」

2人は、2つめの広間を出るとゆるいアーチの橋を渡った。

一層絢爛な3つ目の広間へ足を踏み入れる。

雨音は表情を消し、さきほどよりも強くエンジュの手を握った。

2人が歩みを進めるたびに、扇の奥で貴婦人たちがひそやかな会話が交わしているのが分かる。

どうやら、注目を集めているらしい。

居心地の悪さを感じながら、エンジュは自分たちが夜会の新参者で、しかも兄が青家の青をまもっているせいだろうと推測した。



ひとときわ人だかりが出来ている輪の、その少し離れたところで、  
雨音は足を止めた。

「ここで待とう」

何を、と聞くまでもない。

広間の奥、一段高くなった場所には、玉座が据えられている。

椅子の背には、皇家を守護するという麒麟<sup>キリン</sup>が向かい合って四頭、  
黄金で彫られていた。

周囲の談笑の様子から察するに、まだしばらく帝の登場はなさそうである。

「ああ、ウオンじゃないか」

人だかりの中から、兄と同世代の青年たちがこちらに気付いて、  
親しげに声をかけた。

「なんだ、休暇は領地に戻るんじゃないかったのか」

「こんなところで会うなんて、驚きだな」

「どこの令嬢を連れてきたんだ、水臭いじゃないか」

「俺たちにも紹介しろよ、なあ」

あつという間に、背の高い十数人の青年たちに周りを囲まれ、エ  
ンジュは兄の背後に隠れるように息をつめた。

「なんだ、お前たちか」

「なんだとはなんだ、お前こそなんだよ、その服」

「その言葉、そっくりお前に返してやる」

野次にも似た笑い声がどっと上がる。

くだけた調子で語られる言葉とは裏腹に、彼らの発音は生粋の都周辺の上流貴族のものであり、衣装は贅を尽くしたものだ。

「おい、やめろ。妹が脅えてるだろ」

後ろをのぞき込もうとする青年たちを、片手で払うようにあしらい、雨音もずつと気楽な調子で答えている。

「妹お!？」

おお、とどよめきのような声があがる。

「おう。俺たちは帝へ挨拶に来たんだ、親父の命令でな。絶対、邪魔するなよ」

家にいるときでさえ聞かない、ぞんざいな口ぶりで釘をさす。

初めて兄が、『俺』『親父』というのを耳にした。

ただ呆氣にとられていると、雨音がぐるりと振りかえって彼女に言う。

「学院で一緒のやつらだ。面倒だから、お前は挨拶しなくてもいい」

「ウオン」

「おいおい!」

「薄情な奴だな、」

すぐさま、抗議の声が同時に上がる。

エンジュはついと笑ってしまった。

兄の学院生活の一端が垣間見えたようで、嬉しかった。もう怖くない。

雨音の横に並んで、彼女は作法の教師が完璧だと太鼓判を押したお辞儀をする。

「初めまして、皆さま。エンジュと申します。兄がいつもお世話になってます」

「世話してやってるの間違いだな、」

雨音が口をはさんだが、それには答える者はなく、その場には静かな沈黙が落ちた。

数秒後に、ため息にも似た感嘆のどよめきが彼らからもれる。

我に返って最初に口を開いたのは、雨音に気付いた特に大柄な青年だ。

「私は、都の北に領地を拝領しております、エイシユウ瑛周の子伯ヒロセです。お見知りおきを」

「あ、抜け駆けだぞ！」

私は、私は、とエンジュは一瞬で輪の中心にひきいれられ、身をのりだすように次々に名乗られる。

彼らの笑顔が少し怖い、とエンジュは思った。

「おい、ウオン。俺たち、お前から妹の話なんか聞いたこともないぞ」

「そつだ！なんで今まで隠してた、」

兄は「やれやれ」と肩をすくめると、仲間たちに宣言する。

「そりゃそつだ。お前たちになんか、言えるか。手を出すなよ」  
すでに嫁ぎ先は決まってる。

その言葉に、青年たちから一斉にブーイングが起きた。

同年代の青年たちに囲まれていると、まるで学校にいるようで、エンジュは胸が沸き立つのを感じる。 知らず、笑みがこぼれた。

なんだなんだと軽口を言い合っていると、輪の外側にいる方から

「おい、そろそろだろう」と声がかかる。そうするうちに、衣ずれとともにさわさわと人がひいていく気配が伝わってきた。

「お出ましか」

雨音が息をつくのと同時に、儀礼官がひとときわ高い声で帝の来臨を3度、伝えた。

では後で、また、と口々に挨拶が交わされ、波がひくように、声が消えてゆく。

広間の中央は道をつくるようにあけられ、それぞれがまるで計ったように両際に寄った。

雨音もエンジンジュを連れて、段に近い窓際へさがる。

いつか、人々が深々と礼をとり、緊張が場を支配する。  
衣がすれる気配と、人々が4度の太鼓の音で、頭を起こすのが見えた。

エンジュも兄にならい、目をあげる。

玉座にはひとりの男が座っていた。

「皆、今宵はよく来てくれた」

感情のない、無機質な声。

玉座の男は、確か50もすぎた年齢に達しているはずだが、全くその年にはみえなかった。

玉の落ちる冠をのせた髪は、多少白いものが交じってはいるものの豊かで黒々としていたし、女性のように整った顔には染みや皺が見られない。

そして、人形のように感情を宿していない瞳が下座を睥睨している。

一瞬こちらを見た、とエンジュは緊張した。

だが、それは杞憂であったようだ。

帝は、肘おきに置いた手を軽く挙げ、右に立つ若い男をさした。

「我が息子、四宮<sup>シミヤ</sup>を紹介しよう」

年の頃は、20の半ばあたりであろうか。

玉座の隣に立つ青年は、柔和な笑顔で一堂を眺めた。

髪は銀系のような白で、目はほのおのように紅い。

『神の愛でる者』と呼ばれる容貌だ。

白髪に紅目。

これは、真正帝国で最も重んじられる容色である。

この容姿で生まれた者はいかなる家柄であろうとも、3歳になったら神殿へ預けられることが決められている。

神殿で特殊な教育を受け、将来は神官・神女となり神に仕える。

俗世へ戻る者もいるが、大半は聖職者として神殿の奥で一生を過ごす。

おお、というどよめきが人々からもれた。

「神の御子だ」

「あの噂は本当だったのか」

帝の言葉に囁き返すのが、耳に入る。

これが父君と兄が話していたことなのだろうか。

帝は、後継者に関して存念を明らかにしていない。

この時期に、成人した息子を神殿より呼び戻すということが、どのような憶測を呼ぶのか、30年も帝位に座った人物ならば、分らぬではあるまい。

エンジュが兄を見上げると、彼は食い入るように若い皇子を見つめていた。

いかなる人物なのか、表情から読み取ろうというのか。

繋いだ手に力を込めると、雨音はエンジュに視線を戻す。

「大丈夫か、」

「兄君は？」

大丈夫だ、と微笑が落ちる。

雨音は、エンジュの腰に手を回して、静かに時間を待った。

しばらくすると儀礼官の合図とともに、人々は列をつくり、帝に挨拶をはじめた。

順番はあらかじめ決められており、どんなに高位の貴族であろうと、例外はない。

また、この場にあつても奏上が叶わない人々も多くいるという。貴族たちの格式ばった挨拶に帝は軽く頷き返すのが一般的なようで、ひと言でも賜った者には周囲から羨望の視線が投げられた。

「次は、僕たちの番だ」

「ええ」

2人は、おおよけには位を与えられていないにも関わらず、9番目の順が与えられていた。

エンジュは雨音と中央に進み出て、額の前で手を重ね、膝を曲げて礼をとった。

寿ぎの唱を、静かに歌う。

「おもてをあげるが良い」

許しを得て顔をあげると、微妙な表情の変化だったが、帝の視線が揺れた。

玉座から立ち上がり、ゆったりとした足取りで2人に近づくと、彼は何かを口のなかで呟いた。

その呟きを拾ったものはいなかっただろうが、向けられたエンジュは「まさか、」と彼が確かに言ったのが分かった。

雨音にもそれに気付いたようだった。

だが、何事もなかったように、兄はエンジュをそっと押しだした。前へ進むともう1度、エンジュは深く膝を折った。

「初めて御意を得ます」

「セイリユウ青龍から聞いている」

その返事に、帝が自分の婚約のことを話しているのだと悟る。  
これは始めからの取り決めなのだろう。

「名は」

「エンジュと申します」

「良い名だ。父はそなたを手放すのがさぞ惜しかろう、」  
「もったいないお言葉にございます」

答え、目をふせたエンジュは、周囲からさざめきが広がり、しばらくして緊張感をともなった沈黙が落ちたのに気付いた。  
エンジュのそばに影が落ちていく。



しばらくしてエンジュの左に背の高い人物が長靴をならして立った。

婦人たちの「彼よ、」「あれが」と高くさえずる声が聞こえる。

マントを払って片膝をついた気配が落ち、その人物が耳目を集める若い男なのだと分かった。

衣にたきしめた香がかおり、床にうつる影が濃く落ちた。

御影石の床に、白い裾が広がっている。

蝶丈白だ。

エンジュは目をふせたまま狼狽して、横を見ることができなかった。

「ちょうど良いところに来た、白桜の息子よ。今、そなたの婚約者と話したところだ」

帝のその言葉で、はつきりと彼が自分の未来の夫なのだと知る。不意打ちだった。

こんな状態で初めて顔を会わせるなど、いつ予想しただろう。

内心動揺しているエンジュを挟むように、雨音が穏やかな笑みを浮かべて向き合った。

「白桜家の御子息か。私は青家長子・雨音。今宵は妹を連れ、致参しました」

「丁寧な挨拶、痛み入ります」  
彼が立ちあがって、答える。

2人のすべらかな挨拶に、この場で出会つことは両家の合意であ

ったのだと理解し、エンジュは唇を噛みしめた。

「エンジュ、挨拶なさい」

兄のひと言で、エンジュは彼に向きなおった。

こんなのは聞いていない。

卑怯だ、と兄に叫びたかったが、衆人の前でそんなみつともない真似はできない。

ぐつと言葉をのみこむ。

礼をとり、混乱を断ち切るように、頭をあげた。

「青龍の娘エンジュにございます」

「初めまして、白桜のソウセツです」

顔をあげた先に、白い青年の顔が目にとびこんでくる。

綾の組みひもでポニーテールに結ばれた美しい黒髪。

男には珍しいほどの色白の面。

口唇と眉は細く、それが彼の繊細で生真面目な表情をひきたてている。

そして、西家の白の衣。

彼の切れ長の一重の瞳は、凧いで静かな意志を示しており、老成している。

眉間には薄く皺が刻まれていた。

年は、29だという。こうして直接対すると、年相応に見えた。

じろじろ見つめていたのが、相手に伝わったらしい。

怪訝な表情で、小声で問われた。

「わたしの顔が、なにか？」

「い、いえ」

赤面して言葉につまる。

2人のもとへ、帝が段を下りて近づくのが分かった。  
唐突に、ソウセツの甲に彼女の手が重ねられる。

その行為によって、婚約が承諾されたと周囲に伝わったようだ。  
それぞれの扇の奥や耳元で、ため息のようなささやきが交わされている。

「楽しんでいくといい」

それが終了の合図だったらしい。

ソウセツに手をとられたまま退出し、気付いたら二の広間にいた。  
音楽が軽やかに演奏されている。兄の姿がなかった。  
あわてて周囲を見回す。

「あの　、兄君は？」

「あそこです。話があると」

エンジュはソウセツの差した方を見た。

兄はテラスの入り口付近で、恰幅のよい貴族を相手に何やら話している。  
こんでいる。

どうやら、簡単には戻ってこなさそうな様子である。

「大丈夫ですか」

「はい」

顔をこわばらせたままのエンジュを前に、ソウセツは戸惑ったような表情を浮かべた。

「夜会は初めてですか？」

「ええ。このような華やかな場には、気おくれがします」

「帝都の方は、絢爛豪華を好むのだと思っていました」

「そのようなことは…。帝都へは、よくおいでなのですか？」  
「いえ、数年に1度ほど。でも、故郷の空気がよいのか…わたしには、なじめません」

率直な話し方をする人だ、とエンジュは感じた。

西方では、貴族の子弟は古き慣習に従って、騎士たるべく教育を受けるという。

ソウセツの受け答えは、実直を良しとする騎士の姿勢が垣間見えるようだった。

エンジュは会話の糸口をつかみかねたまま、口を閉じた。

もっ話すことがない。

当然だ、さつき会ったばかりの相手なのだから。

ソウセツはそれに気付いたのか、苦笑いする。

「この婚約が、気に入りませんか？」

エンジュが答える前に、彼は首を横に振った。

「すでに、拒否できる状況ではありませんね。あなたには西家に来ていただかねばならない…われわれのために」

ソウセツの声は断固としていたが、表情はそれを裏切っている。

生まれも育ちも違う、年さえ離れたエンジュを、扱いあぐねているようにも思えた。

エンジュは頷いた。

この婚約に、私情の入る余地はない。

ソウセツが彼女自身ではなく、あまねく帝国に影響を及ぼすことのできる青家の血を欲していることは明確に描くことができた。

「ええ、分かっています」

ソウセツはほっとしたように、エンジンに手を重ねた。

そうすると、彼の手が大きく、かたいことがわかる。剣をふるう者の手だ。

「あなたの安全は約束します。条件は1つ」

私の仕事に干渉しないこと          ソウセツはそう、言った。

「お礼を申し上げるのを忘れていましたわ」

「お礼？」

ええ、とコウヒは目線をあげてリドに微笑んだ。

「私を誘ってくださったことです」

初めてのエンジュが心強いだろう、と彼女を呼んでくれたのはリドだった。

礼などいらないと彼が横に首を振ると、コウヒは視線を落とす。

2人は、1の広間の上部に設けられた開放的なバルコニーにいた。バルコニーとはいっても、屋外にあるわけではなく、広間と広間をつなぐ宙つりの棧敷のような場所で、ここからは、1の広間と2番目の広間のどちらもが望める。

辺りはほの暗く灯籠がゆれ、光の輪を床に落としている。ひと気はまばらで、休息を求めてやってきた男性や、少し年配のカップルがそれぞれの時間を楽しんでおり、コウヒとリドに目を遣る者もほとんどいない。

コウヒが眩しそうに階下に目を向けると、2番目の広間では、ちょうど管弦の音に合わせて円舞がはじまったところだった。

「あれが、エンジュの相手だね」

「どんな話をされているのでしょうか、」

「心配性だね、きみは」

「もちろんですわ」

女性たちのとりどりの華やかなドレスが広がるのを、見下ろしな

がら、

コウヒは「妹みたいなものですから」と言った。

その視線の先には、線の細い青年に手をとられてほほ笑むエンジン  
の姿がある。

多少の緊張の色を浮かべているのを認め、コウヒはため息のよう  
な息をはいた。

リドはコウヒに顔を近づける。

「エンジンばかり見ても仕方ない、踊ろうか？」  
「ここで？」

コウヒは、向き直って問うた。

リドは少年のように瞳を輝かせている。

「むろん。1曲、お相手を」

「よろしいわ」

コウヒが頷くと、リドはにっこり笑って、バルコニーの中央へ手  
をひいて移動した。

風にのって、弦楽器の音が聞こえる。

リドに合わせてステップを踏みながら、コウヒは雨音の言葉があ  
ながち間違いではないと思った。

穏やかな身のこなしや気遣い、ダンスのリードの良さは、彼の魅  
力をよりひき立てる。

「お上手ですね」

「ありがとう、きみも」変わってないね。

「そうでしょうか？あれから一度も踊っていませんのよ」

「春節の舞踏会、だったかな」

聞かれて、コウヒは「はい」と応えた。

忘れようがない。

女学院で催された卒業記念の舞踏会だった。

在校生と家族を含めた関係者を招いて行われる、大規模な夜会。  
その日、卒業を迎えたコウヒにとっては、これが学院で参加する最後の華やかな舞台だった。

たくさんの男性と入れ替わり立ち替わり、踊った。最優等生として祝辞を述べた彼女は、常に学院では注目の存在であり、人に囲まれることに慣れてもいた。

ひっきりなしに続く申し込み。誘い。

そこへ、リドがやってきたのだった。

「きみは、私の申しこみを笑った」

恨みがましい口調でリドが言えば、コウヒは当時のことを思い出して、吹き出してしまう。

「だって、あなたは・・・」

冗談だと思ったんですもの。

そうだ。

緊張しながらダンスを申し込みに来た少年のことを、今でもコウヒはまざまざ思い浮かべることができる。

頬を染めた真剣な顔。

差しだした手が、少し震えていた。

『僕と一曲踊っていただけますか？』

「いいわ、って言いましたわよ」

10年も昔のことです、そろそろ時効ですわね。コウヒは、目を伏せる。

そうは言ったものの、コウヒの胸にあの日の思いがよみがえる。

リドはまだ本当に、小さな少年だった。

あの時、コウヒの肩にも背が届かなかったのだから。

いつか背が伸び、声も低くなり、そして「私」と言うようになった



た。

「それで、私の申し出を考えてくれた？」

リドは曖昧に、唇をひきあげた。

変わらず笑みを浮かべているが、その口元が緊張しているのを、コウヒは感じた。

コウヒは重ねて挙げた手の下くぐって、ターンをし、一礼を返した。

曲が終りを告げている。顔をあげたコウヒはリドの目をじっと見つめた。

息を整えながら、コウヒは繋いだ手を離れた。  
リドが焦れたように、言葉を継ぐ。

「コウヒ、このままきみは変わらないのかい？」

「おっしゃる意味がわかりませんわ」

「 エンジュについて、西家へ行くのか、と聞いている」  
きみの返事をもらいたい、今ここで。

「 エンジュについて、西家へ行くのか、と聞いている」  
 きみの返事をもらいたい、今ここで。  
 リドはせき込むように、ひと息に言った。

瞳は怖いほど、真剣な色を浮かべている。  
 それで、彼が本気で求婚しようとしているのだと、コウヒには分かった。

一時の気まぐれだと思っていたのに。  
 コウヒは宿めるようにリドの腕に触れて、口元を引き下げた。

「 … あなたには、こたえられません」  
 その返事に、リドは顔を凍らせた。  
 「 ウオンのことは待つても無駄だよ」  
 「 ウオン様？」

急にエンジュから雨音<sup>ウオン</sup>へ話題が移る。  
 リドは、コウヒの白い頬に手を伸ばした。  
 コウヒは半歩さがりながら、リドの目を覗き込む。真意を問いた  
 い。

頬のあたりが強張るのが、分かった。  
 「 ウオン様が、どういう…？」  
 「 きみがウオンを好きなのは知っている」  
 「 何を…。そんなことはありませんわ。なんとも思っておりません」

「 なんとも？嘘だろう、コウヒ」  
 「 いいえ」  
 「 ムキになってる」

リドが苦笑う。

コウヒは顔を赤らめながら、違います、とかたくなに首を振った。

「私の家は、あなたに益をもたらすことができません」

コウヒは努めて冷静な声を保とうとした。

「世事にうとい、貴族とは名ばかりの家ですもの」ただ、それだけですわ。

「そうかな？世事に疎いという点では、私の家も相当のものだと思うけど。」

だから、気にすることはないよ」

あっけらかんと言い、首を傾げる様子に、コウヒはため息をついた。

彼は分かっているのだ。

四大公家の一翼を担う黒家コラのリドとは、同じ貴族といっても格が違いすぎる。

この国では、貴族の序列は厳格に定められ、その古さと血筋の確かさを尊ぶ慣習によって、殆ど変動はしない。もう百数十年も。

新しく叙爵される貴族の位は、およそ一代限りのもので、彼らの多くは勢力を持たない。

国首時代の法によってそれは決められている。

「それに私は、家族の鼻つまみ者ですよ」

「じゃあ、帰る必要はないね」  
私と来ればいい。

リドがにつこりと笑うので、コウヒはめまいがしてきた。  
彼は何を言っているのだろっ。

「私の話を聞いていらっしやいます？」

「うん、勿論」

「私は家から縁を切られています。だから、」

「私の家族になればいい。青龍<sup>セイリョウ</sup>がきみの後見をしてくれるだろう」

青龍は否とは言わないはずだ。

リドは続ける。

確かにその通りではあるだろう。青龍は、実家からコウヒを常に守ってくれる。

彼女が望みさえすれば。コウヒは少しの間、言葉が継げなかった。

「私のことが嫌い？」

「いいえ」

それは違う。

コウヒは即答した。

「良かった」

何が良かったというのだろう。

婉曲に断っているというのに。しかし、コウヒの目から視線を離さずに、リドは言う。

「すぐに、とは言わない。私は気長な方なんだ」

返事は保留でかまわない。

「リド様……」

「でも、否定の言葉は聞かない」

リドは突如、強い調子で言った。コウヒの肩を掴んで「コウヒ、」と呼ぶ。

「私の気持ちを否定しないで欲しい。ずっと、好きだったんだ」

「私は、」

「今、きみが誰を好きでもかまわない」たとえウオンでも。

リドは抑えた静かな声に戻して、言った。

彼の琥珀色の瞳に映った彼女の表情は、今にも泣きそうに揺れて

いる。

「エンジュと一緒に行くというなら、止めない。研究もつづけるといい」

私は待とう。

リドはふいに視線を外すと、広間に繰り広げられている煌びやかな人々に目をやった。

重い感情がす、と断ち切れ、コウヒは足りていない酸素を求めるように息をすった。

そして、彼の視線を追うように階下を臨む。

ひときわ華やかな集団のなかに、偶然、知った顔を見つけた。

「あれは……タルヒ。」

呟きは、リドに届いたらしい。彼はひとり言のように言った。

「珍しいこともあるもんだね、彼女。妹が心配で来たのかな」

「隣にいるのは、誰でしょう？」

「彼が四宮シミヤだよ」

四宮：、コウヒは口のなかで呟く。

遠目にも、その白髪青年が、若い貴族たちの中心にいることは分かった。

四宮は、近頃貴族の間でよく耳にするようになった名前だ。

長く空白になっている皇太子の座に彼がつくのは時間の問題だろうと、見られている。

彼のそばで、ひときわ目をひく少女。

髪を燃えるように赤く染め、巻貝のように結いあげた上に朱珊瑚の宝飾品で飾りたてている。

黒緋のドレスには歪み真珠が鱗のように縫い込まれており、そんな豪華な格好に負けないくらい艶然と自信にあふれた微笑みを浮か

べていた。

エンジュの異母姉だ。

「奇抜だ」

リドの素直な感想に、コウヒはちょっと笑った。

昔からタルヒは、人目をひく少女だった。

美しい容姿と意思の強い瞳に自負心をにじませて、はっきりとしたものの言いをした。

こうして彼女の姿を見るのは、じつに数年ぶりだ。  
手紙はしょっちゅう交換していたが。

「いつものことですね。タルヒらしい、というか」

リドの推測は間違っていない、とコウヒは思う。

タルヒは彼女なりの感覚であるが、離れて暮らす妹を気にかけている。

ここにこれほど目立つ格好で来たのは、妹に気付いてもらうために違いない。

「ちょっとやりすぎですけど…」

「うーん…いつ見ても何というか。しかし、彼女はちょっと、苦手だな」

そうリドが呟くのに、コウヒは吹き出した。

苦手どころではあるまい。

女学院時代、タルヒはコウヒの『蕾』だった。

監督生と初級生。

『お姉さま』であるコウヒの卒業の祝いとなったあの舞踏会で、ダンスを申し込んだリドに言い放ったひと言は、忘れられるものではない。

タルヒは、目をつりあげて2人の横から割って入ったのだった。

「『わたくしのお姉さまから手を離さない、坊や』だったっけ？」

「ごめんさい」

「きみが謝ることじゃないよ、コウヒ」

彼女のあれ、嫉妬だったんだね。

コウヒは強張った笑顔をはりつけた。

世間知らずのタルヒが起こす騒動に、いつの間にか巻き込まれ、その後始末に奔走した日々を思い出す。強気で決して自分を曲げず、癪癪を起こすこともあった。

入学したころのタルヒはその言動がもとで、同級生とだけでなく多くの上級生とも衝突を繰り返していた。見かねたコウヒが、彼女を『ひきとつた』のだ。

「タルヒももう、大人ですわ」

「…そう。だと、いいね」

リドが奥歯に物のはさまったような言い方をする。

コウヒは眉をあげ、目で理由を問うが彼はふわりと笑っただけで、答えは返らなかった。

卒業後も『紅梅院』<sup>こうばいゐん</sup>で教鞭をとっているタルヒと、隣接する『緋の学院』に在籍しているリドとは、今でも行き来があると聞いている。

「この前に会ったときも、きみの話になったよ」と、リドはそれだけを言った。

コウヒは返事に窮し、速度が変わった音楽に耳を傾けるふりをし、タルヒがゆったりと窓際に近づいていくのを見つめていた。

「飲み物をとってきましょう」

とソウセツがここを離れてから、数分たつ。

エンジュはかたわらのソファに腰を下ろした。

新しい靴が足を締め付けているようで、つま先がしびれるように、痛い。

エンジュは顔をしかめると、スカートの内側でそつと靴を脱いだ。衣の裾は床をひきずる長さがあるから、人から見える心配はしなくていい。

「靴は、はいたほうがいいわよ」

突然、斜め後ろから低い声が落ちて、エンジュはびくり、と体を震わせた。

上体をひねるようにして、相手を確認する。

「…姉さま！」

「あら、驚かせたかしら」

久しぶりね、と笑って、姉のタルヒがエンジュの顔をのぞき込んできた。

彼女の手には、葡萄酒が入ったとおぼしきグラスが握られており、それをエンジュに渡す。

「エンジュの騎士はどこへお出かけ？」

この問いかけに、姉がエンジュの行動をずっと見ていたことを知る。

「彼は私の騎士ではありませんわ、姉さま」

「ふうん、そう」



じゃあ、しばらくわたくしと話をしましょう。

彼女はそう一人勝手に決め、エンジュに飲み物を勧めた。  
エンジュは「いただきます」と口へ運ぶ。思ったとおり、南部特産の黒葡萄酒だった。

ひと口喉を潤すと、自分がいかに渴いていたかを実感する。  
ひといきに傾けようとする妹の手に自分の手を添えるようにして  
タルヒは、グラスを脇に取り上げた。

「全部はだめ」

口にする物には気をつかいなさい。人から勧められたものは、特に。

「親しい人からのものでも？」

「親しい人は、余計によ」

隣に腰をおろし、頬づえをついてエンジュの顔をしげしげと見つめながら言う。

「ずい分、会ってなかったわね、エンジュ」

「お会いしたかったわ」

「わたくしもよ。でも『あの方』がいるから、おまえのところへは行けない」

エンジュは返答に困った。

タルヒは昔から、父君のことを嫌っていた。

姉の母上と父君が不仲だったから、それを引きずっているのではないか、とオノセが言ったことがある。

タルヒは、けっして父を父とは呼ばない。

「あの方は相変わらず？冷たくて、無関心、神経質で…」

ああ、こっやって思い出すだけでも虫唾が走る」

あけすけな言い方に、そう姉はこういう人だった、とエンジュは思い出した。

現在タルヒは、青家とは直接の関係を持たない。

赤家セキの分家の1つ、朱シユウ綬家の養女となり、『紅梅院』で教鞭をとっているためだ。

この女学院は、貴族や名望家の子女を集める神殿の外部団体で、男子校『緋の学院』と対になっている。

両学院は実際のところ、その名が示す通り、南部諸侯である赤家が管理、運営の全権を握っていた。

「セキラ様は、お元気ですか？」

エンジュは話題を変えようと、急いで姉の母の息災を尋ねた。

「昨日、文をいただいたわ」お元気なのでしょうね。

エンジュは、義母であるタルヒの実母には全く面識がない。

セキラは父君の最初の正妻で、朱綬家から嫁いできた。

夫とは水と油のような関係で、タルヒの誕生後すぐに別居したという。

父がついに別の女性に雨音を産ませると、彼女は1人実家へ戻ってしまった。

タルヒが妹に、母親について詳しく語ったことはない。

エンジュの持つ情報の多くは、タルヒの『花』であつたコウヒによる。

「今日は、お姉さまも来ているのでしょうか？」

今度は、姉がエンジュに熱心に尋ねた。

タルヒにとってコウヒは今でも、唯一無二の『お姉さま』なのだ。

エンジュは、入り口まで一緒だったことを告げる。

「その見立て、お姉さまでしょう？エンジュ」

エンジュのドレスをしげしげと見つめて、羨ましそうにタルヒは言った。

「ええ、正解。採寸のまえに、いっしょに考えてもらったの。花はリドお兄様だけど」

「彼、来ているの？」

「ええ、今はコウヒと一緒にいると思うわ」

「そう、そうよね。…いいわ」

何がいいのか、よくわからなかったが、エンジュは姉の言葉に頷いた。

コウヒのことを聞きたがるのも、相変わらずだ。

タルヒは口をひきむすんで、「だいじょうぶ」と自分を納得させるように呟き、グラスに残った葡萄酒を傾ける。

「ところで姉さま、」

エンジュは、空になっていくグラスをじっと見つめて口を開いた。

「あら、なあに？」

「姉さまのお知り合いなの？」

怪訝な表情でエンジュの視線を追ったタルヒは、相手に気付いてにっこりと笑った。

「…四宮様」

親しげに相手の名前を呼び、ゆっくり立ち上がる。

それは玉座の隣に居た、あの青年だった。

見間違いのような、銀髪に紅目の異形。

帝の皇子だ。

彼はタルヒに並ぶように1つ歩を進めると、手を広げて鷹揚に言った。

「貴女の姿が見えなかったから、探してしまった。邪魔をしただろうか？」

タルヒは「いいえ、殿下」と否定して、エンジュに目配せした。靴を履けということらしい。

エンジュはつま先で、脱ぎ捨てた靴をそつと手繰り寄せると、腰をあげる。

「妹を紹介しますわ、殿下。青家のエンジュです」

タルヒの言葉に、エンジュは大げさにならない程度に深く礼をとった。

宮廷では、目上の者の許しがなくては話しかけることができないという暗黙のルールがある。

四宮は頷く。

「先ほど帝の御前で、会いましたね」

その言葉で口を開くのを許されたのが分かった。

「はい、今日は婚約の許しをいただきに参りました」

「そう…そうだったね。あれは実に、計算された演出だった」

「殿下」

タルヒのとがめるような口調に、四宮は肩をすくめ「悪かった」と手を伸ばした。

タルヒは半身をずらして、その手をするりとかわす。

「心にもない謝済は受けません」

「これは手厳しい」

四宮は大らかに笑う。

こうして彼に向き合つと、その身から立ち昇る力の大きさが鋭敏に伝わり、鳥肌がたつほどだ。

エンジュよりも彼の近くに立っている姉にそれが分からぬはずはない。

「妹のせいではありませんわ」

「分かっている」

なだめるような声で四宮がアルハナエの腕に触れる。

今度は、彼女も拒まなかった。

「エンジュ。殿下はね、わたくしの親しいお友達なの」

親しいお友達。

エンジュは、その言葉を口の中で反芻する。

権門の次代としてだけでなく名門校の教員としての顔も持つタルヒは、宮廷にも顔が広い。

美しく社交的な彼女の周りには、蜜に群がる蝶のように、常に異性が囲んでいるのだと、侍女たちが教えてくれたことがある。

華やかな噂には事欠かない姉だったが、その心が真実誰のものなのかは、エンジュには分からない。

「親密なお友達、だよ」

と四宮はうそぶいた。

タルヒは彼を軽くにらんだが、エンジュにはその表情までもが親密さと映った。

四宮の紅い目が、悪戯っぽく輝いている。

彼は片手を伸ばすと、アルハナエの手にもつグラスに指をかけ、自らの口元へ運ぶ。

底に残った葡萄酒が彼の喉に消えた。

「殿下、」

「喉が渴いていたんだ、タルヒ」  
嘘おっしやいな、と腕をつねるふりをしたタルヒに、四宮は微笑んだ。

「さあ、遊びはここまでだ。そろそろ、用意をしよう」

はい、とタルヒが頷いた。

エンジュが気づいて、周りを見渡すと、紗がかかったように遮断されていて、誰の顔もはつきりとは見えない。

眼の前で姉と四宮だけが平然として、こちらを見ている。  
まるで、分厚い緞帳に閉じ込められているようだ。  
ぞっとした。

畏だ。

空気の薄い山頂にいるように、いや、閉じ込められているように、  
息苦しい。

「な、何をなさったの？」

「話をしやすくするために、少し厚いカーテンをひいておいた」

術を使って遮断したと言いたいらしい。

四宮の隣で、タルヒは恐ろしいくらい静かな目で、妹を見つめて  
いる。

「正直に話してくれたら、何もしないわ。隠しごとはなしよ、エン  
ジュ」

「何を？」

「おまえの婚約のことを聞きたいの。…なぜ白桜なの？知ってるこ  
とを話してくれるかしら」

「知りません」

どうして、そんなことをお聞きになるの？

エンジュは、タルヒに訊き返した。

結界をはってまで、妹に尋ねる話とは思えない。

「父君はいつだって、説明なんかなさらないでしょ。…もしかした  
ら、兄君がご存じかもしれないけど」

タルヒは鼻をならして一蹴した。

「それは無いわね」

「コウヒにも、お母上のところまで行ってもらったけど、成果はな  
かったわ」

肩をすくめたエンジュの前で、タルヒと四宮が顔を見合わせている。

2人は長いこと見つめあっていた。

まるで、心の中で話ができるみたいに。先にエンジュに視線を戻したのは、四宮だった。

「正直に言って、きみの返事次第では実力行使に及ばざるを得ない」

隠そうとするなら相応の手段をとる、と言いたいらしい。

その声の不穏さと気の高まりを感じて、エンジュは彼が何をしようとしているのか知り、青ざめて首を横に振った。

タルヒは顔色をかえた。

「止めて！わたくしの妹です」

「タルヒ」

「おやめください！」

「貴女は一度、同意したはずだ」

タルヒ。

遮られ、怒りに満ちた声で四宮が名を呼べば、タルヒが顔をそむけたまま背にエンジュをかばう。

姉の背が強張っているのが、エンジュにも分かった。

「家族をとるというのか。…貴女を捨てた家だ」

「エンジュに罪はありません」

「タルヒ、」

荒々しい感情のなかにも親情を込めて彼が呼ぶと、タルヒは肩の力を抜いて、エンジュに向き直った。

姉の目には、揺れ動く心を映しだすように痛みが浮かんでいる。



「姉さま、いたい・・・」

「選んだのよ、エンジュ」

疲れたような声で姉は言う。

四宮が伸ばした手に、彼女はさすがのように身を任せた。

美しい紅い目が、姉を見つめている。

四宮の額には、第3の目といわれる、花びらにも似た紋が彫られていた。

神の御子であるという、しるしだ。

皇宮の女性たちも似たような化粧をしているが、こちらはもっと形が複雑でしかも消えることがない。

「タルヒ。貴女の大事なものに危害を加えるつもりはない」

「信じています」

タルヒはしばし彼と向き合っていたが、表情を消しざるとエンジュに重く口を開いた。

「エンジュ、わたくしたちは四宮様を玉座に据えるつもりでいる。そのために、青家の情報が必要な」

わたくしたち、というのが南部勢力であることは、政治にうといエンジュにも理解できた。

豊かで、中小貴族が多い南部は、昔から青家とは対立を繰り返してきた。

南部諸侯であるタルヒも、いやおうなく勢力争いに巻き込まれているということか。

エンジュは震える口を叱咤するように、言葉を紡いだ。

「父君と争うのですか。…この平和をくつがえすと？」

「そのようなつもりはない」

四宮は即答したが、エンジュは信じられなかった。

だいたい、父君は彼が有力候補だと語っていた。

玉座が欲しいならば、青家を探る必要はない。

玉座に一番近いところに、彼はもうすでに在るのだから。

「平和：おまえは、これが平和だというの？」

タルヒがひっかつたのは、エンジュの別の言葉だったらしい。

何かに耐えるように視線を落とす。

「西との結びつきは、いつそう均衡を危うくするというのに。おまえは、」

「はいはい。それ以上、妹を苛めないでくださいよ。姉上」

突然、薄暗いカーテンに光が差し込むように術が解かれ、雨音があらわれた。

タルヒははっと顔をあげる。

「<sup>ウオン</sup>雨音、いつ

「今ですよ」

皮肉げに応じる雨音の周りを、謁見の間で会った青年たちがずらりと固めている。

ソウセツもいた。

皆一様に、息をつめるようにして四宮とタルヒに対峙している。

エンジュは唐突に、兄君に手首をつかまれてひきよせられた。背に庇われる。

「このような場所で、密談ですか？」

「違う、雨音。わたくしたちは、ただ…」

「ただ、何です？姉上」

雨音は吐き捨てるように言った。

エンジュは、兄の左の袖口をぎゅっと握る。

「どういうおつもりか、お聞かせ願いたい」

わたくしたち、という言葉に兄が反応していることは、エンジュにも分かった。

雨音は怒気をこらえている。

対するタルヒは静かな声に戻っていた。

「特別なことは何も。久方ぶりに妹と話がしたかっただけ」  
その答えに雨音は唇を歪めた。

ソウセツが、雨音の右袖を軽く叩いて前に歩み出た。  
強い目で、四宮を射抜く。

「殿下。このようなやり方は不快です」

「それは残念だ。一応、配慮はしたつもりなのだが」

「帝御前の夜会のかたすみで、ですか」

「ほかに、方法も機会もなかったものでね」

私は気が短いほうなんだ。

しれっと四宮は言う。

互いに歩み寄る余地がないことを理解すると、ソウセツは口調をかえた。

「殿下、あなたは欲しいものを望まれるといい」

「それは、君たちの協力が得られるということかな？」

「家同士を騒乱にひき込むことをやめて下さるならば、静観しましょう」

四宮は口元に笑みをたたえた。

まるで、とても面白いことを聞いた、とてもいうように。

「今は、ということか？」

「ええ」

「では、私も今は退こう」

四宮はそう言つとタルヒの腕にふれ、身を翻した。

姉は、雨音とエンジンを見つめたが何も言わずに彼の後を追うように、広間の人波へ消えていった。

雨どいを伝う水音がする。

エンジュは視線を硝子窓の向こうへ向けた。

雨が降る中庭をのぞむテラスで、リドが皇后と話をしている。

なかばささやくような、そして真剣な顔つきからは、2人が政治に関する話を話し合っているのだろう。

1 昨日の夜会の終りは、散々だった。

姉とはあれきりで姿も見ることができなかったし、兄君は馬車に戻っても怒りが解けないようでひと言もエンジュと口を聞いてくれなかった。

コウヒはコウヒで、父君に話があると出かけて行っただけ、姿を見ない。

硝子の向こう側は、テラスで囲まれた広大な温室になっている。

皇宮の表奥、皇后のサロンだ。

エンジュは内輪の茶会に招かれていた。

朱鷺色で設えられたテラスは、全面が硝子張りになっており、贅を尽くしたものである。

ここで、皇后は親しい客を招き、手づから茶を振る舞う。

皇后は、青家から嫁いだ人物で、父君の従兄妹にあたる。

子どもがいけないということもあって、普段は政務には一切かわらず、新種の花の栽培に精を出している変わり者の后だ。

花が咲き乱れ蔓の延びるに任せた温室を眺めて、エンジュもつい納得してしまう。

エンジュの向かいには、ひとりの少女が座っている。

口をへの字に曲げて、けっして視線をあわせようとはしない相手をちらりと見ながら、エンジュは心の中でため息をついた。

どうして、あなたがここにいるのよ。

彼女は、王族。それも帝のそばで補佐をつとめる黄葉オウバの宮家のひとり娘だ。

名を、イトという。

それにしても、と思う。

はじめて会ったときから、いけすかない相手だった。

『あら、あなたが青家の末の娘さん？お姉さまとはちがって、なんというか：おかわいらしい方ね』

馬鹿にされたような響きを感じとって、つい言い返してしまったのがいけなかった。

『どうもありがとう。姉さまにも、あなたからだとそうお伝えするわ』

むっと、イトが口をひきむすぶ。

多分、お互い気があわない相手だったにちがいない。

だが、皇后を訪ねるたびに、ここに遊びに来ているという彼女に出会うことになった。

『イトの父親はいそがしくてのう……。学校が休みのときは、妾のもとへ呼ぶようにしているのだ』

仲良くしてやっておくれ。

そう、皇后に頼まれても相手にその気がないのなら、仲良くなんてできない。

それなのに。

さっきだって。

『2人とも、仲良くな』

と言い置いて、皇后とリドは席を離れたのだ。

やっかいだ。

そんな気持ちを表情にだしたまま、エンジュは目の前におかれた茶をすすった。

沈黙が落ちて、どのくらいたただろう。

「ねえ、あなた聞いているの？」

エンジュはその問いかけに、顔をあげた。

イトは続ける。

「お兄様のことを、あきらめるように、あなたのお姉さまに言ってちょうだい」

不愉快なの。

イトは視線を合わせようとせず、苛立ちをにじませた横顔で、エンジュに吐き捨てるように言った。

「『お兄様』って誰のことよ」

だいたい、姉さまには心に決めた人なんかいないわ。

どういうことが、と尋ねるエンジュに、イトは怒りで赤く染まった顔を向ける。

「<sup>シミヤ</sup>四宮お兄様のことよ！先日の夜会では、べったりくっついていたくせに――」

「違うわ、姉さまはただのお友達だとおっしゃっていたもの」

「しらじらしいわ。何も知らないような顔をして――」

わたくしは知っているのよ！　あなたの母君は、青龍様とは正式な婚姻関係になかったのですってね。

イトが汚らわしい、と眉をひそめる。

「あなたのお姉さまだとて、嫡子かどうか知れたものじゃないわ。

そんな方に、四宮お兄様の妻になる資格はないわ」

青家じゃ、あなたのお姉さまの出入りは禁止されているというじゃないの。

だまれ、と小さくエンジュはつぶやいた。

いつも物事をはつきりと口にする彼女が、急にしずかになったのを見て、イトは「当然よね」といっそう語気を強めて笑う。

「本当に、あの方がお兄様の正妻になれるというのなら、わたくしも考えてあげてもよくてよ」

「だまれ、と言ったわ！」



「だまれ！」

エンジュがイトに言つと、彼女は馬鹿にしたように肩をすくめる。  
「あなたは、ここではもう何の力ももたないわよ。辺境の西家の、しかも12もある分家の1つへ嫁ぐんですもの。野蛮で、むさくるしい家にね」

「私のことはいい。でも、姉さまのことは訂正して」

「いやよ。あなたたちなんか、しょせん国賊の娘じゃないの！」

コクゾクノ、ムスメ。

イトが高らかにそう宣言したときだった。

エンジュは目の前の花瓶をつかむと、彼女向かつてふりあげた。突然の暴拳に、扉の前で控えていた侍女たちが茫然としている。

イトは投げつけられた青磁器を、とつさによけた。

どん、とにぶい音がして、絨毯のうえに瓶と花が散乱する。

侍女たちは口ぐちに悲鳴をあげた。

何事か、とテラスから、こちらを向いた皇后とリドの前でエンジュは風を呼びこむと、術をとねえた。

テーブルの上に残った水差しをイトに投げつける。

「やめるんだ！！」

リドの声が耳に入っではいたが、エンジュには止める気などなかった。

目の前が怒りで真っ暗になる。

水を術で泥水にかえると、すっかりイトの美しいドレスを狙った。

べちゃ、と音がして、立て続けに悲鳴が続く。

イトのスカートは泥にまみれていた。

完全に蒼白な顔になっている彼女に、エンジュは舌打ちをする。

「よけるから悪い」ただの水で許してやろうと思ったのに。

唇がふるえる。父と姉を侮辱したイトには、これぐらいでもまだ足りない。

こぶしを握りしめ、強い感情と戦う。

視界が涙で、にじんだ。

真っ先に我にかえったリドは、黙ってエンジュを引っ張ると、啞然としている皇后に軽くお辞儀をして、扉のそとへ連れ出した。

控室で2人になるのを待ち、けわしい顔でのぞき込む。

「エンジュ、何があった？」

「何も」

エンジュは、爪のあとが残るくらい、手をにぎりしめた。

「何も、なわけはないだろう」

「言いたくありません」

何があつたのかと再度問うリドに、エンジュは口を閉ざした。

泣きそうな目でにらみつける彼女に、リドは言う。

「謝ってきなさい」

「嫌」

「手をだした君が悪い。女王殿下に謝るんだ」

「絶対に、死んでも嫌です」

リドは、ため息をついた。

辛抱強く、同じことを繰り返す。

「今なら、間に合う。暴力に訴えるなんて、許されることじゃない。早く」

エンジュは首を振った。

リドは、長いため息をつくど、こめかみに手をやった。

「分かった。君はここで待ってて。私はオノセを呼びに行ってくる」

回廊を幾つも曲がり、水庭園の間にかかる通廊を足早にすぎる。等間隔で並んだ円柱に黄色い辛夷が巻きつき、こぼれるように花を咲かせていた。

皇宮に季節は廻らない。常春の世界に包まれている。あまねく帝の恩寵によってここは、外界とは完全に隔絶されているのだ。

「姫様、お待ちくださいませ！」

後ろから、オノセが追いかけてきた。

エンジュは足をとめ、向き直った。

「邸へ帰ります」

「なぜでございます、」

「リドお兄様に聞いたのでしょ、私が言うことは何もない」

「宮家の女王殿下に無体を働いた、とうかがいました。何もなしではすみません」

「オノセに説明することなんて、何もないわ！」

激しい勢いで言葉を返す。

2人は一步も引かず、言い合いをつづけた。

礼儀と身分、謝罪というやり取りが何度も交わされる。

頬は怒りで紅潮し、目には苦々しさがもっている。

「オノセなんて、知らない！私は謝らない、絶対に！」

ついてこないで！

ついに、エンジュは叫ぶと、庭への石段をかけ下りた。

「姫様！」

オノセは声で止めたが、エンジュは振り返りもせず、あっという

間に庭の向こうに姿を消した。

長い通路のような緑の生け垣をいくつも抜けると、緑の絨毯にも似た丘が広がる。

エンジュは、走る途中で邪魔になった靴をぬぎ、髪からかんざしを抜いた。

髪を解き、ただ夢中で駆けると、怒りがす、と抜けていくようだった。

なだらかな丘の上には、人の手をほとんどいれていない庭園があった。

小さな花々と湧水のような噴水、それから大きな木が立っている。皇宮の数ある庭園のなかでも、エンジュがとりわけ気に入っている場所だ。

エンジュは頬を木に寄せた。

風が流れる。

エンジュにも大変なことをしでかしたということは分かっていた。イトは四宮のことが好きなのだろう。

ただ、許せなかった。

でも、このままにはできない。

あふれる感情で、頬をつたう涙を隠そうと、エンジュは木にしがみつく。

その時、生け垣から風が抜けた。

「こんなところで、何をしているんです」

「誰、」

エンジュは短く誰何する。

建物のほうから姿を現した青年を見て、エンジュは表情をかえた。  
「ソウセツ様……」

迎えにきました、と彼は言った。

「いつからいらしたのですか、」

「あなたが泣いていたあたりかな」

平然とそう言う彼に、とっさに6種類の言葉が思いついたが、どれも不適當で却下する。

「あなたと話したいと思って」

「話なら、今、しています」

エンジュは唇をかみしめ、うなるように返したが、彼は首を傾げただけだった。

エンジュの前までやってくると、ソウセツはにつこりと笑う。

彼は、エンジュのみだれた髪にすつと触れる。

目をあげれば彼は驚くほど、近い位置にいた。

「わたしが行って謝りましょう」

あなたの婚約者として。

相手は世襲王族の姫だ。このまま放っておけば、宮家は黙っていないだろう。

のちのちややこしいことになるのは、目に見えていた。

「あなたは、ここに」

エンジュに背を向け宮へ戻ろうとしたソウセツは、袖口をひかれて足をとめた。

ソウセツの衣を、エンジュが握っている。

「だめ　　ぜったいに、謝ることなんてない！悪いのは向こうだもの。あんなひどいこと言っ　　」

しまった、とばかりに口をおさえたエンジュに、ソウセツは目を

細めて膝をついた。

エンジュは首をふる。

その仕草に、彼女が何を言われたのか、ソウセツはうすうす察した。

目を合わせて、手をとる。

「わたしのせいでもあるのでしょうか。本当に、すまない」

エンジュは首をふる。

ちがう。なぜ、謝るのだ。

ソウセツのせいではない。

「違う。ソウセツ様は悪くありません」

必死に言葉を紡ぐエンジュに、ソウセツは微苦笑をうかべた。

帝都における西の地位は、低い。

十二西家じふにしせいが、帝都には居住しないことも大きな理由の1つだ。

本家・白家が西方支配を許されたときに、一族もろとも移住したのだ。

幼くして騎士たり、質実剛健を旨として育つため、万事が綺羅しい都風には馴染めない。

帝都に住まう貴族とは、生活習慣の根本から違う。

戦を身上とし、国境線を守るために、血で血をあらう。

帝国の祖、かつての騎馬の民、そのままに。

それゆえ帝都周辺の貴族連中からは、野蛮だの、不吉だのとさげすまれる。

王家に連なる姫のイトであれば、当然の反応であったのだ。

エンジュは、青家の姫君として誰からも大切にされて育った。

しかし、これからは彼とともにある限り、この中傷や悪意に耐えねばならない。

「彼女は、父を国賊と呼びました。私はそれが許せなかった」  
エンジュは言った。

長年、国首の一族と敵対してきた保守的な貴族のなかには、いまだ父に対して不信感を抱く者も多くいる。

すでに、その地位も領地の多くも手放しているというのに、  
20年もの前に。

「分かっています」

ソウセツは静かに立ち上がると、エンジュの手を離した。

「それでも、このままにはできない」

エンジュはうなだれた。

そうだ。分かっている。



結局エンジュは、ソウセツについて、皇后の部屋まで戻った。靴をはき、髪を手早くなおしてここにいる。

自分は絶対に謝ることなどできないが、彼が謝るのもちがうのに。エンジュは、口を引き結んで、扉の前に立った。

「あなたは、ここにいて良い」

と彼は言ったが、エンジュは首をふった。

扉をたたくと、中に招き入れられる。

惨状の面影は、もはやなかった。テーブルの上の茶器や絨毯の染みは全て、片付けられている。

ソウセツが皇后に謝罪の意を伝えたと、侍女が心得たように奥の部屋ヘイトを呼びにいった。

あらわれたイトは、衣装を着替えていたが疲労の色をにじませ、悄然としていた。

2人を認めると、居心地が悪そうに身じろぎしたが、引きかえすことはしなかった。

それもそのはずだ。

さきほど、自分が悪口を言った相手なのである。

「お初にお目にかかります、イト女王殿下」

このたびは、我が婚約者がご迷惑をおかけしたようで謝罪したい、とソウセツは口にした。

ソウセツは、膝をつき、深々と礼をとった。

騎士の礼だ。

イトは慌てた。

騎士の礼は、本来ならば帝のみに奉げられるものなのだから。

「あの、そのようなことをしていただくわけには、まいりませんわ」

「謝罪をお受けしていただきたいのです」

「ええ、ええ。わかりました、お受けします、だからですから、おやめになってください。

イトは真っ青になったまま、早口で言いつのった。

雪のような白い衣、髪を結ばず背に流したソウセツの装いは、華美ではないのに洗練されており、人目を惹いた。

皇后や侍女たちもいる前で、騎士に謝罪されるなど、いくら王族であっても少女のイトには酷なことなのだろう。

「ありがとうございます。お話できてよかった」

ソウセツは、立ち上がった。

エンジュの手をひき、皇后とイトに一礼する。

「今後も、彼女と懇意にしていただければ、と思います。なにせ、これから西へ　　ことは比べられぬほどの辺地で、野蛮で見知らぬ者たちと生活することになりますので」

最後に彼は強烈な皮肉を口にして、にっこりと笑った。

それでは失礼を、とソウセツはエンジュをつれて、あっけにとられている女性たちを残し、退出する。

廊下を歩く間、彼は何も言わなかった。

「あの、ありがとうございます」

エンジュは、こわごわ隣を歩くソウセツに言った。

「礼はいりません」

「でも、」

「必要なことだった。それだけです」

「ソウセツ様、怒っているのですか？」  
「いいえ」

エンジュは足をとめ、背の高い青年を見上げた。

ソウセツの物静かな白い横顔からは表情が読めない。

ただ、騎士としての誉れのある彼に、あのようなことをさせてしまったという後悔がエンジュを襲う。

「ごめんなさい」

「謝罪もいりません」

ソウセツはきっぱりと言った。

2人はそのまま黙って、いくつも回廊を曲がり、車寄せについた。  
オノセとリドが、こちらに気づいてやってくるのが見える。

「わたしは明日、ここをたちます。向こうで、会いしましょう」  
では、とソウセツはエンジュに告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6875y/>

---

黄昏をとどめて

2011年11月27日21時45分発行